相愛記

黒瀬 二水／著

205231-000-6

特11-549

M42

EDV-0281

水相說愛記

明治
4 26
内交

謹んで亡父の靈前に捧ぐ

特II
549

序

十七年前、予は飄遊の客として東海道を下り、徒歩して伊賀の山路を越えた。瀬多、膳所、石山、大津、草津などの町々を歩いた頃は、春の雪の地にある頃で、あの湖水の畔は予が旅情を擅にしたところであつた。

黒瀬君は近江の人である。その頃の予は二十二歳の青年で、鳥井川村といふところに農夫の鍬を打つて居た刀匠堀井老人の佗しい住居など

を訪ねたことはあつたが、まだ黑瀨君を知らず、又互に知るべき年頃でもなかつたのである。一昨年、はじめて君が予の家へ訪ねて來られた時、予は曾て君が故鄕にも遊んだことを知つた。斯の記憶を胸に浮べながら、予は今この書のはじに僅かの言葉を書き添ふるものである。

有體に言へば、予は君が春待つ心を制へつゝ、猶白雪の下に萠える若草の如きを希ふものである。しかし、君には君の氣質がある。この書を公に

する迄の君は、實に努めたものであつた。君は、日中、家の業を勵み、夜に入つては燈下に筆を執つたといふ。君はそれを自ら出版する意があつて、草稿をある印刷所に托した。不幸にも、その印刷所は火を失した爲に、君の草稿は全部類燒の災に罹つた。熱心なる君は更に稿を起して、毎夜油の盡くる頃まで、つぶさに勞作の苦みを嘗めたといふ。斯うして、新に出來上つたのが、この『相愛記』である。

佛蘭西のある小説家曰く、持てるものはこれを出せ、無きものはこれを得よと。又曰く、稟才は根氣なりと。予は今、名高き大家の簡素な、明晰な訓言を君が著作のはじに記して、これを以て君が出發を紀念し、又君を見送らうとするものである。

島崎藤村

自序

私は此の拙劣な處女作を公にするに當つて、幾乎序文らしいものを書く積りでしたが、さて愈々となると、何うも書く事がなくなつて了つた。一體私は著述などをするやうな柄ではなかつたので、烏滸がましく斯う打つて出るのは、只管慙愧の念に堪へぬのです。

其のお恥かしい物語は、十九歳の秋までを、金持になりたい一圖の野心に驅られて、東奔西走、未だ肩上げの取れぬ内から諸國を流浪して、死ぬべかりし窮境を、私は目下大阪在住の宣教師、モーレー博士に救つて貰ひました。其れから、私は宗教的教育を受けて、始めて讀書でもするやうな身になつた。翌年笈を負ふて上京して、去る私立の語學校へ通ふ傍ら、或

る神學校の末席をも汚して居りましたが、行々傳道師にならうと云ふ志望は、間もなく薄らいだ。私のやうな者では、到底其の聖職を全うし能はぬと思つたからです。而して私の赴いた方向が、此文藝の世界でした。

勿論其の時私は、何の學歴も文才もない鈍物でありながら、如何で藝術家になれやうかと、非常に前途を危んだ。けれども、私にはもう他の方面が鎖されてあるのだから、兎に角行けるだけ行つて見やうと、暗雲流の決心をしたのは、丁度廿一歳の春でした。其の後私は新計畫が覺束なくて堪らぬので、或る知人の助言に依つて、私は古本屋を始めた。まア斯うしてゐるなら、一代私の目的は成就しないでも、生きて居れると落附きまして、讀んだり、書いたり、コツ〳〵牛の歩行を續けたのです。けれど石の上にも三年と云ふ事がある、私も何か一つ世に出したいと思つて、昨年の

三月から稿を起して、途中一度改作して、七月から今年の二月までに、可なり長いものを書上げました。而して國光社へ印刷を頼んだが、二月の十八日の晩、其の印刷所は全然燒けて了つた。で、私は五月廿四日から又も起稿して矢張以前と同じ「相愛記」を九月廿七日に脱稿したのです。

此の小著に就いて、私は多少苦心をした。燒けた草稿とは、同じ主意の積りでありながら、其の實内容は殆んど別物になつたが、何うやら私は藝術的生命の一端に觸れたやうに思はれて、是れで辛々產聲を上げたのかと喜んだ。而して今校正をするに際して、私の作の如何にも未熟杜撰なのに呆れて居ります。で、もつと五年も十年も修業を重ねてから出版したいのですが、今更仕方がないから、私は大方の諸君の雅量に訴へて、どうか御指導を仰ぎたいと、偏に冀ふのでございます。

此の運びになるまでに、私は島崎藤村先生の多大の恩顧を蒙つた。殊に鄭重な序文を下さるなど、私は此の上ながら深謝致します。其れから。挿繪を描いて下さつた鏑木清方氏、表紙の意匠を凝して下さつた知友大崎茂木君に御禮申します。尚又此の出版に就いて、色々お世話になつた有樂社々主に負ふ處が多いと思ふて居ります。

明治四十二年十月十六日

興樂弊房に於て

著者識

小説

相愛記

一の一

黒瀬二水著

惣じて富饒な家庭へは足の向き易いものである。別に依賴心もなければ、侑められる茶菓が高尚で、座蒲團が絹布物だから、居心地が可いと云ふ理由でもないが、近來流行の生活難病に罹つてゐる樣子が見えると、つい其の病人を見舞ふ氣にはなり惡い。平素の友誼は何時か失せて了つて、へイ〳〵一寸御近所へ參りましたんで、御無沙汰のお詫びになんぞと、つべ

こべ嘘を吐いて、銅の臭を嗅がして貰ひには行く。若し其れが綏くり串談の一つも云ひ得る先だつたら、日頃の自慢話の種になるので、裏若い嬢様のある家なら尙のこと、紅の血を燃した青年は、何か所用が出來ないか知らと念じて居る。

基督教信者には、まさかそんな傾向はない筈だが、何しろ、今宵の第一水曜會が此の山邊の宅で開かれると、千駄ヶ谷教會の信徒が過半數集まる。どんなに天氣の惡い夜であらうとも、他の家での場合より遙に盛況を見るのである。

此の家の主、花子は今年二十九歳であつて。赭味を帶びた健康さうな容貌の、ちと飾のある隆い鼻で、始終口元に笑を湛へた、其處に生毛がうぞうとある、丈のすらりとした發達の可い體格の婦人だ。敢て美人とは云へぬが、

パチエラーオブアーツの肩書と共に、米國婦人の長所を有つてゐるので、決して醜い邊りではない。殊に談話の上手さは、接した人に非常な快感を與へて居る。現職女子大學院の英語の教師で得る收入は、左迄豐でもないが、横濱の實家が頗る盛な貿易商だから、彼女の美的生活は意の如くである。來客が時間の經過を忘れる事は屢々起る現象で、多少長居をしてゐやうと、襖がちよい〳〵細目に開くやうな心配はない。

而して花の三月、丁度是れからの陽氣のやうな妙齡の千代野と云ふ彼女の從姉妹が同居して居る。眼の表情に富んだ色の白い細面の、嫣然笑ふと、齒並の愛くるしい娘である。擧動振り爽かに、日々上野の音樂學校へ通ふ。其の外に美術修業の初子は此處へ身を寄せて居るし、玄關番までが女の苦學生なので、家庭内に男の氣は些とも無い。夫れはさうとして、今や教會員

は續々集つて來た。

花子は如才のない挨拶を爲ながら、

「さアどうぞ、彼方へお進みなさいまし。」などと何くれ接待をしてゐる。彼等は大抵下座の方に畏つて、頭ばかり叮嚀に下げる。話題も殆んど愛だとか、信仰だとかに限られてある。血氣盛りの學生ですら穩順しい處女のやうに、膝掻合はせてゐる向きが多い。が、今上つて來た若槻のみは番狂はせで、ッカ〳〵花子の側へ近寄つて、

「山邊さん、階下で牧師が呼んでるせ。」

「あ、さう。」彼女は振返つて、まア、此の人はと云つたふうに眉を顰めた。

「何でも珍客があるんだとさ。」とぶつきら棒で、やア〳〵と四邊の人々に頸衝く。花子は降りて行つた。

少時すると、和田牧師は一人の壯者と共に現はれた。面長な髯の濃い顏には、溢るゝ溫情を湛へて、

「皆さん、よくいらッしやいました。徐々始めませう？　今晩は新しい兄弟を一人紹介しますよ。」と夫々會衆に柔和な會釋をする。

壯者は處を得惡さうに踞んでゐた。三十内外に見える大きな骨骼の男で、丈は稍低い方だ。一寸頭髮へ櫛を入れて置くが、濶い額に陰鬱な皺を刻めて、揉上げをだらしなく伸ばして、太い眉毛を手痛く蹙めて、鐵緣の眼鏡の底には、凹んだ眼をどんより光らしてゐる。其れは穢黑い艶氣の失せた容貌で、脣の厭に突出た無恰好者だ。けれどすッきりした鼻や厚い唇の邊りに、朴直な優しさが仄見える。奈何云ふ經歷を有つてゐるのであらうかと、一座は甚く興味を喚起された。

「さア、宮井様、此方へいらッしやい。何も遠慮は要りやしませんよ。」

「いえ先生、これで結構です、全く恐縮ですから。」と兩手を握合はして、肩を張る。

牧師は荐りに勧めて、否む彼を到頭床柱の近くへ坐らせた。花子や他の人達も言葉を添へたのである。

十畳に八畳を打擴けた座敷には、フロックコートの紳士、脊廣の中年、小倉袴か或は制服姿の學生連に、黒紬の被布着た老婦人や、庇髪の女學生などで、盛な集會が出來た。白木の天井からぶら下つた二つの電燈は、色んな思想を包んだ彼等の外貌を照してゐる。

小杉と云ふ長老の司會の許に、先づ開會の讃美歌が唱はれた。而して彼は陸軍中尉の手前もあらうに、泣きたいやうな女々しい感話を五分間程した。

それでも會衆は、若槻を除くの外皆難有さうに聽いてゐた。

和田牧師は彼の所感を望まれて、

「私は今晩何かお勧めするよりも、宮井さんの尊い實驗談を伺はうと思ひます。」と云ひつゝ一寸躙出た。

一の二

和田牧師は紹介の辭を述べる。

「宮井さんは私が赤坂教會に居た時分の面識でして、其の後深遠なる志望を懐かれて、南米の秘露へ大飛躍を試みなすつたのですが、私は一昨日久振りの御來訪を受けまして、吃驚致しました。何でもモンタナ州の無限の沃野に新日本帝國を建設なさらう御計畫から、二三の同志と共に目的地へ

赴かれる途中、土人のインカスに擁されて、餘儀なく土地の選擧騷ぎに捲込まれたと仰有います。其れからは、實に悲慘な奇禍が續いて、一年餘りも禁錮されなすつたのぢやさうですが、何とも同情に堪へない次第であります。けれども皆さん、私は先程も其のお談話を承つて、今更ながら神の攝理を感謝せずに居られなかつた。罪なく縲紲の辱めをお受けになつた幾月日こそ、宮井さんがほんとに神の國へお進みなさる祝福の時であつたのです。何と味ひ深い話しぢやありませんか。私は其の得難い御實驗を伺つて、恵みあつき神の生きた御教訓を倶に頒ちたいと思ひます。

終りに一言申したいことは、宮井さんの目下の境遇であります。未だそんなに存じませぬが、隨分肉體上の戰ひをお有ちのやうですから、私共は出來る丈け相助け相勵まして、愛する兄弟姉妹の實を擧げたいと、切望致します。……、さア、何うぞ宮井さん。」

と牧師は彼を促した。

けれど宮井は靦然げに首垂れて、只はア〳〵と云つてゐる。餘り面目を施されたので、却つて困つたのであらう。司會者が是非にと逼つても、矢張頭ばかり下げてゐた。で、座は自然白らける。次のやうな讃美歌が唱はれた。

一　はなちりうせては、　たきゞにうられ、
　いへまづしければ、　ひとにすてらる、
　たれをかたのみて、　何にかたよらん、
　たゞ神のむすぶ、　あいのともあり。

二　いのちは葉末の、　つゆにもにたり、

ちゝさりあねゆき、　ともまたねむる、
たれをかたのみて、　何にかたよらん、
たゞ神のむすぶ、　あいのともあり。
たゞ神のむすぶ、　あいのともあり、
かたみにはげまし、　はげまさるれば、
はかなきうきよを、　わたるつきひも、
春野をわけゆく、　こゝちこそすれ。

三

讃美歌が濟むと、二三の人が宮井のために祈禱を捧げた。さも彼の此の席へ連つたのを喜ぶやうで、衷心から彼を勵まし慰めた。而して司會者は再び彼に御感話をと云つた。すると宮井は、それではお言葉に甘へますと、居住ひを直したのである。

彼は先づ牧師の述べられた紹介の辭は、毫も受くべきものでないと謙讓して、案外流暢な感話をする。

「……、成程私は西部海岸地方の勞働社會に失望しまして、アンデス山の横斷を試みました。けれども格別辛酸を嘗めた譯ではありません。何しろ一萬尺以上の高地ですから、多少空氣は稀薄ですが、珍しい綺麗な草花の咲き亂れた野原や、色んな禽獸の囀る森の中を、驢馬に乘つて馳廻つたくらゐなもので、寧ろ愉快でした。が、只遺憾なのは、目的地へ達しえずしてリマ府へ逆戻つて、散々大失敗を演じたのであります。到頭揚句の果てには、殘忍極まる囚人扱ひをも受けました。

「其の當時の事情や、私の精神狀態は、迚もお話しになりませんから、略しますが、私は最早生きたくない、何の道自滅だと、無暗に厭世思想に駆

られてゐたのでした。さうする内に、天主教の僧侶が參りまして、說教をしたのですが、薩張言葉が通じませんから、仕方なしに此の（と小形の英語のバイブルを手にしながら）聖書を與へてくれたのですよ。私は以前宗教の解らない人間でしたが、何分無聊に苦しみ、生死の巷に徘徊して居りましたから、飢渴いたやうに聖書を讀みました。すると、私のやうな逆境兒でも、幾乎慰められるやうな意外な文字が見出されたのです。若し私に多少の宗教的素養がありましたら、より以上の喜悅に滿されたのでせうが、其れは不條理ながら非常に力附けられたのでございます。

「序に申したくなりましたのは、其の頃のことでした。只つた一つの窓の端へ、コリブリと云ふ小鳥が來初めたのですね。熱帶地方では最も小さい鳥の一種でして、綺麗な綠色の金光りを放つてます。其の美しい翼が鶺鴒

のやうに飛ぶと、ヒユ〜〜鳴りまして、實に美妙な天然の音樂を奏でるのですよ。私は毎朝コリブリが來るのを樂しみに、眞暗な月日を過しました。兎にも角にも私の友人が、救ひ出しに來てくれる迄生きて居られて、而して今晩皆さんの斯う云ふ厚い御同情を享けるやら、冥加に餘るお慰めを戴きえましたのは、全くバイブルと其のコリブリの賜物でございます。寔に錯雜した申樣で、甚だ失禮致しました。」と言ひ了つて、宮井は氣の拔けたやうに俯向いた。

一座は耳を澄して、此の深刻な實話を聽いた。未來の文豪を以つて自任してゐる若槻は、心の中で詩的々々と叫ぶ。婦人連や感情家の大抵は、涙含んでゐたのである。

一の三

此の邊の家は庭木類が乏しい代りに、園藝には適してゐる。殊に山邊の邸宅はさうで、南へ少々斜の高臺であるから、日當りが良くッて、排水の便は頗る妙だ。可成り廣い地坪に色んな苗床や、雨にたゞれた、草花の鉢がある。此頃は兎角順氣が晩れて、寒かつたが、今日は稀な暖い好天氣である。

初子は好きなシヂラリヤの蕾が漸々開いたので、緣先で莞爾眺めてゐる。そつと頰擦をしかけて、其れは止めにした。

「先生々々、シヂラリヤが咲きましてよ。紫と赤とが。」

「さう、貴女、それお好きね、貴女の性格に合つてるわ。」

「でも、綺麗ですもの。」

「其の名の起原おぼえてゐらして？」

「え、灰色の毛を葉が被つてるから、拉丁典のシヂラリヤと云ふンでせう。」

「さう〳〵。」と花子は障子の中から。

「そしてね、錨草や、貝母の蕾が大きくなりましたのよ。御覽なすつて？」

「えゝ。」と氣のない返辭をする。

初子は些と疲れたふうに緣柱へ凭れて、春日をぼか〳〵浴びつゝ惚然考へる。私は體が太くッて、ゴッ〳〵無愛嬌だのに、こんな愛らしいシヂラリヤに性格が合つてるだつて、山邊先生の敎育法は、餘り旨過ぎてよ。——

代々木の方の空は長閑に霞んで、聳えた欅の梢近くを、鳶が一羽舞ふてゐる

舞臺は薄物の棚引いた無限の面積である。

書齋に籠つて、花子はイノックアーデンの詩を飜譯してゐる。半は道樂から、或る英語雜誌に講義を書くので、恰好の譯字が見出されぬやら、說明が厭に長くなるやら、陽氣の加減で頭腦が痛むやら、思ふやうに筆が運ばない。で、茫然頰杖を突いてゐると、

「先生、お客樣でございます。」と玄關番の竹乃が云ひに來た。

「誰方？」

「あの、番町の姥やさんでございますよ。先生に一寸お目に懸りたいと申されます。」

「さう、では此方へお通し！」

五十位な顏色の蒼白い姥やが、低腰に入つて來た。眼の下の縮子に皺を寄

せて、至極叮嚀に挨拶をする。花子は鷹揚に受答へて、

「さア、ずッとお進みなさいまし。」

「ハイ、お難有うございます。誠に何うも飛んだお邪魔を致しまして、……。」と一間程離れて、俯向き勝ちでゐる。

「豐子樣は如何ですか、近頃御無沙汰してますが。」

「ハイ。」と言ひ淀んで、

「何うも色々御心配がお有んなさるもんですから、毎日ぶら〳〵して被居るのでございますよ。其れに就きまして、……。」とまた澁る。

「伊豆で何か惹起つたのぢやないですか、私は未だ伺ひませんけれど。」と焦躁さうに花子は緣障子を開けた。

伊豆と云はれて、姥やは悄然とした。實は仔細に成行を話して、彼女自身

の意見も述べたいのだが、浮虛喋り過ぎては惡いと思つて、過失なく主命を果さうと、氣を採むのである。

花子と姥やの主家大澤との關係は、永の年月の連續で、豐子の父錦之助は舊彼女の實家の奉公人であつた。其の後彼は幸運に乘じて、現在朝日生命保險の社長の椅子をも贏得た程の隆盛だが、花子は以前の因緣からにや、幾乎目下者のやうに遇する傾きがある。併しながら、豐子とは骨肉も啻ならぬ親密な交際をしてゐる。そして彼女は何も錦之助の奉公時代を知らぬのだから、或は花子の態度がさう見えるのであらう。彼女はおろ〳〵してゐる姥やの先を越して、豐子に逢ひに往かうと、云ふのであつた。

一の四

三四時間後に、花子は大澤家の黑塗の門を潛つた。赤松の目隱しを横に、嚴めしい洋風の玄關へ昇りかけると、向ふから豐子の夫勝文が出て來た。頭髮の禿げた家扶體の男が一人附いてゐる。五つ紋の羽織を着流して、白縮緬の兵兒帶をぐる〳〵捲いた優姿は、流石に華胄の生立だけあるが、のつべりした顏は窶れて、屈托さうに見えた。花子が透さず會釋をしたのに、素知らぬ風ですた〳〵行つて了つた。で、彼女は一種の暗示を受けて、頷きつゝ旋て豐子の居間へ通つた。

「よくまア……！」

「ほんとに御無沙汰しちやつて、濟まなかつたわ。」

「いゝえ、私こそよ。」

豐子は斯う何氣なく迎へたが、花子は四邊の陰鬱さに驚いた。緣障子の端

へ當る夕日影や、衣紋掛の艶ッぽい着物迄が妙に悲哀の調を帶びてゐる。けれど豐子の美しさは、餘り變つてゐない。黑々した髮の紐が――思ひ惱みに痞せたのであらう――一入輪廓の佳く見える頰に懸かつて、宛然名人の繪のやうだ。派手やかな新紬の綿入れに、花葡萄地の被布を羽織つてゐる。

談話は一向機まない。女中が食事を告げに來た。

「何もございませんけれど、花子さん。今晩は緩くりなすつて下さるでせう。」

「えゝ、ですがね。私、御飯は可いのですから、どうぞお構ひなさんなよ。」

「ほんとに？」

「私が遠慮なんぞするもんですか。」と澄してゐる。

「ではねえ、竹や。私もまア可いから、呼ぶ迄彼方へ往つてお出で。」

「ハイ。」と女中は立ちかけて、

「未だお早うございますか知ら。」と云ひつゝ金屬製の洋燈に火を點けて往た。

花子は火鉢に手を翳しながら、

「まア、どんなことなの？　あつさり打開けなさいな。私、出來る丈け同情してよ。……先刻勝文さんに會ひましたッけが、何だか變だわね。」と相手の動止を目戍つた。

すると豐子は强度の電氣に打たれたかのやうに、頭へ上つたが、辛々決心が着いたやうな面色で、

「もう何も彼も話しますから、一寸待つて〻頂戴よ。」と急々部屋を出た。後で花子は色んな想像に驅られて、當推量を逞しくしてゐると、程なく彼女は銀瓶を持つて來た。顔を洗ひに往つたのか、張りの佳い眼の緣はぽッと赤うなつて、頰には薄すり櫻色が浮んでゐる。机の側へ坐つて、茶盆を引寄せて、

「私、全く困つてますのよ。何だかきまりが惡かつたもんですから、つい……。それはね、込入つた事情があるのよ。幾ら考へたッて、些とも解決が着かぬのですもの。若しか斯う云ふ場合でしたら、貴女は奈何なすつて〻。どうぞ敎へて頂戴な。」と云ひつ〻茶を煎れて侑める。

「え〻。」と眼を瞠つて、

「兎に角一通り伺ひませう、でなけりや貴女。」と躙出る。

「例へばね。」と今更のやうに彼女は羞澁んで、手巾を弄つたり、座蒲團の端を摘んだり、疊の緣を抑へたりしながら、

「或る婦人に思ひ思はれた戀人があつたと思召せ。而して其の男子は愛のために洋行しちやつて、それッきり音信がなかつたのでせう。する內に婦人の方では、境遇が變つたもんですから、愛のない結婚を强いられたのよ。其れを彼女が拒んだのは當然だわね、私はさう思ふわ。ですが、それは情ない風說が新聞で傳はるやら、何や彼やで、到頭婦人は周圍の壓迫に負けちやつて、心を殺したのですッて。處がね、貴女、四年振りに其の男子が飄然歸つて來たのよ。……。」と絕入らぬばかり顏を背向けた。

花子はもう大方呑込んだので、

「其の婦人は貴女でせう。戀人てばどんな方？」と思はず胸を抱へた。

沈默は暫時續く。

彼女は友の戀人が宮井であらうとは、夢にも思はなかつたが、何うやらさうらしい節々があるので、其の上餘り得切込まなんだ。何故ならば、花子は去る水曜日の晩、偶然宮井の爲人に接して、其れから譯もなく彼が腦裡に宿してゐる。未だ一向昵近でないのに、彼の影は常々男性を蔑んでゐるにも拘はらず、兎角友誼の境を越しさうだ。で、云々の人なら、島渡出會つたことがあるなぞと、打明けられないのみか、彼女はつい嫉妬心に驅れた。今迄豐子に秘密にされてゐたのが面憎かつた。が、そんな氣配は些とも現はさないで、

「ねえ、豐子さん。其のお方の寫眞がおあんなさるでせう。何でしたら、拜見な。」と色々言ひ掛ける。

「えゝ、ですが、……。」

「可いぢやなくッて、貴女のやうにさう秘密になすつちや、お相談も何も出來やしないわ。」

「さうね、でも貴女はお笑ひなさるから。」と眉を顰めて、密と花子を見た。豐子が今日姥やを山邊の宅へ遣したのは、非常な煩悶を經た結果である。所夫の有る身でありながら、往時の戀はさう容易に語られたものではない。けれど十分覺悟を極めたのだし、彼女の助力を仰がねばならぬし、生死に係る場合だから、辛々彼女は手箱から袱紗包を取出して、一枚の寫眞を花子に渡した。

彼女は平氣を裝ふて眺と見たが、正に宮井のであつた。五六年前に寫したのであらう。昨今の彼とは雲泥の差で、肉附の立派な逞しい男振りである。

太い眉や締つた口元の邊りには。偉丈夫の相が現はれて、大きく云はゞ、聊か蓋世の意氣が灰見える。それにしても、どんな苦勞をして來たのであらうかと。彼女の思ひは先づ宮井の方へ走つた。若し豐子に幾乎猜疑の眼があつたら、彼女の動止は餘程不思議に映る筈だが、全く豫期けぬことゝて、只もう恥かしさうにそは〳〵して、

「ねえ、もう可いでせう。どうぞ誰にも仰有らないで頂戴よ。(と寫眞を取返しながら)女は境遇に左右されるから、駄目だわね。私、貴女が羨しくツてよ。」

「まア、そんなことを、……。些とも悲觀なさるに當らないわ。ほんとに立派な方ですもの。」と曖昧に云ふ。

「あら。」と豐子は淋しい笑ひを洩して、寫眞を仕舞ひかける。袱紗の中に

は、幾通もの手紙が一緒にしてあつた。

「其れ、何ね、一寸お見せよ。」と逸さず手に取らうとする。

「え、ですが、そりや可けません。」と躍氣になつて。

「此れを御覽なすつたら、大概解るのよ。」と狀袋の擦破れた一通を擇出した。

恐ろしい長さうな手紙である。花子が其れを讀みかけると、彼女はまたやきもきして、

「此處からになさいよ、只一寸植物園で會つたゞけですから。」と急しく首の方を十行ばかり折込んで、顏を熱らすのである。

一の五

花子は密と溜息を殺して、許された處から讀んで行く。豐子も胸を抱へて覗込む。

『……、中學を卒へると直ぐ高等商業の入學試驗を受けに來たのです。大に前途を祝して、青切符でやつて來たのですが、貴嬢方は國府津からお乘りなすつた。多分貴嬢のお母さんと兄さんでせう。お三人で私の側へお掛けでしたから、私は始めて貴嬢を見ました。世には氣高い方があるものだ、と、吃驚したのです。

『何分攝津の池田邊の山出しですからね、嘆美したのも無理はありませんよ。而已ならず私は貴嬢方の間に、非常な清い愛の溢れてあるのを伺つて、感服致しました。一つお上げなさいよ、ねえ、豐さんと、お母さんが仰有つたら、貴方は嫣然其の美しい指先で、林檎を剝いて下すつたが、私は其

の時の嬉しさを追想する度に、毎も無限の新しい感を與へられます。中形の浴衣をすらりと召して、お下げに結つて被居つたでせう。私は其の優しいお姿を何時迄も忘れえませんでした。

『若しこんな麗しいお方と清い交際が出來たら、どんなに幸ひであらう？成功が其れを齎すならば、奈何云ふ辛い勉強でもすると私は思つた。したたか刺激されて、入學試驗はお蔭でパスしましたが、私は實に薄命兒です。翌年の六月、國許からの急電に接して歸省しますと、――こんなに打明けるのは失禮ですが、まア聽いて下さい。私の精神では、天地間で最も親しがつてゐる貴嬢のことだから――私には一人の實姉があつて、其の嫁いでる大阪の竹川といふ煙草商が、親戚の義理合ひから私の父を誘ふて、巨大な投機事業を持込んだのです。其れが散々失敗に終つて、私の家の財産

は殆んど其の犧牲になつたのです。心配さすまい姑息手段から私に秘して居りましたので、……矢張是れは止しませう。若し私の微意をお察し下すつて、お目に懸れるやうな幸福が得られたら、幾らも申されませうから。兎に角私は半年程の間に、相當な財産も父も母も同胞も悉く失つて了つて、學校を退學するべく餘儀なくされたのです。

『重ね〳〵私は途方に暮れて、今年の一月再び東上しました。最早落魄を極めた浪人で、勉學の餘暇の欲しさに、麹町區役所の衛生係へ入れて貰つて、毎日コツ〳〵掃除番に通つて居ります。併しそれが一つの光明を運んでくれた。去る五月の春季清潔檢査の際、私は巡査と共に計らず貴邸を伺つて、序にお庭を拜見した。菖蒲が遣水の邊りに咲いてあつた。ふとお座敷を覗いたら、貴嬢は花を生けて被居つた。私の胸は譯もなく騒いだの

です。勿論汽車の中で林檎を戴いた懐かしのお方とは、其の時思ひ及ばなかつたが、翌日役所で戸籍簿を調べて見て、私は始めて夫れと確めました。同時に私の慕ふてゐた人は斯う云ふ上流の令嬢で、自分の境遇は奈何かと歎かず居れなかつたのです。けれども私は其の架空な希望を打消す譯には行かないものですから、蹶然逆運に奮闘して、一層苦學の實を擧げつゝあるのです。そして今日植物園で、……。』

「ねえ、もう可いでせう。」と豐子は云つた。

植物園の文字が出て來ると、何故か讀されないと見えて、

「まア、お待ちよ。」

「後は何でもないから。」と一生懸命になる。

花子は手紙を放して、少時ぼんやり考へた。餘りに豐子の戀が突飛なので、

自根現實の感が起らない。宛然浪漫派の小説にでも魅せられたやうな心地になつて、彼女自身も何處か空想界に翔廻る。豐子を見損なつてゐたのに呆れると共に、宮井の經歷や性格には、盡きぬ興味を覺える。で、花子は失れとなく色々彼女に訊きこんだ。

すると豐子は靦然げに斯う述懷する。つい〳〵さうなつて了つたので、其の頃は隨分無邪氣なお轉婆であつたと思はれる。怖くッて仕樣がないのに逢つて見ると、意氣洪然と逆境に超絶してゐて、貴孃の愛さへ得たら、僕はどんな苦鬪でもする、實業界に身を立てやうと思つてゐたが、到底匹敵されないから、一番美術家になると、彼は間もなく打開けた。而して自分の氣の所爲か、描く人の眞心の所爲か、侮り難いものが出來たので、是れならば、生涯を俱にしても決して恥しくない。頼もしい男子だと、自分

は迷ふた。……何の動機で洋行したとか！……美術の研究に伊太利へでも往つたのなら可いが、或る日自分の不在の間に、父が彼を呼寄せて、散々な侮辱を加へた。其の當時は色んな緣談があるやら、勝文の來初めた時分で、大方父を誘惑したのであらう。自分は後から姥やに聞いて吃驚して、父に詰つたが、一向要領を得ぬから仕方がない。おづ〳〵お詫びに行くと、彼の云ふには、どうも物質の壓迫に堪へられぬから、暫時方針を變へて、南米で出稼をして來る。若し境遇の迫害に打勝つて、待たれるなら、四五年待つてくれと、それで末を誓ふて、契を堅めて、あかぬ訣別をしたのは、四年前の春であつた。其の後は彼の音信を仇に待つた。一昨年の夏であつたが、新聞紙に南米移民の窮狀と題した悲報が傳つて、宮井某外一名は戰死乎捕虜になつたと附記してある。で、移民會社の多羅

尾と云ふ社員を訪ふなど、凡ゆる苦痛を嘗めたと、喘々語つて、彼女は手巾を眼に當てた。洋燈の火影が彼女の姿を一層哀れに見せてゐる。

それだのに花子は、

「何時其の宮井様とかはお歸朝なすつたの？」

とこんな罪なことを問ふ。

「あの、私が伊豆へ往つてます時……！」

「勝文様と御一緒にね。」

「えゝ。」

「そしてどんなに仰有つて？」

「何とも言つてくれませんのよ。もう〳〵愛想を盡されたのですから。」

「でも何か……。」花子は多少の活劇があつたらうと思ふ。兎に角是れ

で、伊豆から歸京後の彼女の樣子は讀めた。

「いゝえ、……。ですが、最早其のお話しは出來ないわ。奈何したら可いでせうね。ほんとに私、困つて了ふのよ。」

奈何したらと言ふのは、彼女が自由の身になりたい志望である。花子は既にさう察してゐるので、頗る當惑した。が、流石に彼女が可哀想でならぬし、何しろ案外な大事件だから、若し是れが自分の場合であつたら、宮井の退いてくれたのを感謝して、凝然現狀を維持する。事茲に及んだ過去の愛を追ふて、凡てを破壞したら最後、それこそ回復の附かぬ不幸であらう。

一旦結婚した者が孤獨になると、幾倍辛いか知れぬと聞いてゐる。殊に勝文には永らく愛されたのでないか、善々自己の地位を顧みて、家庭の平和を保たねばならぬと、心苦しく忠告を與へた。

豐子は全然當てが外れたので、落膽して了つた。勿論彼女もさう思つたのみならず、其の實行を務めた。宮井には濟まぬが、何の道顏の合はされた譯でないから、此の儘勝文に事へてゐやうと苦しい決心をした。けれど彼が兎角氣を措いて、動ともすると厭味を云ふので、冷やかな夫婦間は尙更冷たくなる。すると自分で定めた覺悟や理窟は力が失へて、懷しい戀人に心臟を占められる。こんな怖ろしい虛僞を續けるよりは、寧そ單獨になりたいと思はざるを得ない。であるから、勝文の去るやうに仕向けたが、さて彼がいよ〳〵其の氣になると、急に情緒がぶらついて、半は喜び、半は心細さに涙含む。それに母が荐りに反對するやら、何や彼やの不見目な情實ばかりで、彼女は確な味方が欲しくてならぬのであつた。

「……、貴女は初中終外形よりか精神をと、仰有るぢやありませんか。

ですから私、貴女にお願ひしたら、屹度希望を與へて下さるだらうと思つたのよ。」と悔しさうにする。

「では、私がさうなさいと云つたら、決行なさるのね。」

「えゝ。」

「奈何しませう？　私。」

「でも愛は絕對的のものぢやなくッて？」

反對に出掛けた豐子の言葉には、花子は殆々弱らされた。

二の一

「何方へ行きませう？」

「そら、何方へでも。」

「毎も奈何な處へいらつしやるの？」

「別に何處へも行きませんな。」

「日比谷公園は俗な處ね、私、厭なのよ。」

「ぢやお好な處へお供しませう。」

「まア、お供だッて、おほゝ……。」花子は心中稍得意である。彼女は宮井と何處か靜な處へ散歩に行つて、綏くり話合はうと思ふてゐる。山王下から櫻田門の方へすた〳〵出掛ける。

宮井にそんな考へのあらう筈はないが、彼は失意の身の寂寥から舊知の牧師を訪ふて、宗教的慰安を得やうとした。既に此の間洗禮を受けて、千駄ケ谷教會の一員にして貰つた。それで所謂愛する兄弟姉妹の觀念を以て、斯う親しくしてくれるのだ。信仰上の事は一向確に解らぬけれど、實に感

謝に堪へないものがあると、聊か人生の溫籍に觸れてゐる。が、花子と一緒に歩くと、彼女の低くつぶした庇髪からか、蝙蝠傘に持添へた手巾からか、得ならぬ佳い香ひが時々して來るので、其れにはしたゝか陷まされた。

「貴方、音樂はお好き？」彼女はこんな事を聞いて見る。

「駄目ですな、丸で耳がなつてませんから。」

「そんなぢやないでせう。では繪畫は……？」

「油畫なら多少趣味があります。」と云つたが、其れ以上は語らなかつた。

「さうでせうとも、貴方は屹度藝術に趣味を有つて被居らうと思つてよ。何時か綏くりお遊びにいらッしやいな。日本繪の方ですけれど、宅にも貴方のお仲間がありますから。」

「難有う、何れお伺ひしませう。」

これで折角引出した談話は途切れた。二人は丸の内の小松原へ來た。來迚の日曜日が上野の花の見頃であらうと云ふ陽氣で、彼方此方杖を曳いてゐる者が多い。眼に入る程のものが皆美しく、樂しさうに見えるのが、今日日の特質である。春の女神が天から魔藥を降らして、ぼんやり暖かう脹らめて、浮き立つやうに醉はすのか知ら。空の色合や、綠の樹木や、花は元よりペンキ塗の家でも、石垣でも、道芝でも、踏みつけられた砂利までが一際化粧してゐるかのやうである。別して若い女の頰の美しさたら無い。嫁の見合ひは春に限ると云ひたくなる。

「貴方、春は何う？」とまた問ひかける。

「何だか刺激が強くて困りますな。それに此頃は眼鏡を廢したもんですから。」

「掛けていらッしやりや可いに。」と立ち止つて、眤りと流眄をくれた。

宮井はもう歸りたくなつたので、もどかしさうに四邊を眺めてゐた。すると後から、

「やア、宮井君。」と聲をかけた者がある。見れば、多羅尾久治郎で、にこにこ近寄つて來た。

「何處へ行くんだね。」

「何處ッて、君の處へさ。まア可い處で逢つた。君こそ何處へ行くんだい。」

「うむ、……何か用があつたかね。」

「厭につけ〳〵云ふせ、そらあるさ。一寸此方へ來たまへ。」

多羅尾は彼を楠公の銅像の横手へ連込んだ。三十二三の丈の高い男で、色は太平洋の潮風や、南米の炎熱に曝されて、どす黑う光つてゐる。茶がゝ

つた脊廣を着て、櫻の仕込杖を持つてゐる。何だか輕々しい調子の才子肌に受取れる。

「時に彼の女は何うしたい、一寸ハイカラだなア。君も中々隅に置けないせ。はッは……。」と八字髯を捻つて、笑つてゐる。

「何有、山邊ッて敎會の信者さ。女子大學院の敎師だよ。」

「さうか、君は敎會へ行つてるか。」多羅尾は眼を瞠つた。

「あ、何うも淋しいからなア。」

「そら、さうだらうッて、容易に疵は癒えまいね。僕も實は內々心配してゐるのだ。彼の時文通して置きや可かつたのに、君が反對するもんだから、到頭打壞しちやつた。聞いて見りや女にも無理からぬ事情があつたらしいよ。だから破れたものは仕方ないとして、斷念してくれたまへ。」と慰め顏に云

つて、卷莨に火を附けやうとする。が、旋風が厭に烈しいので、燐寸を何本使つても其の目的を果さない。

「無論斷念してるさ。それよりか君の用事は何だね。」宮井は憤れッたさうに云つた。

「用事はそれだよ。暫くまた旅行をするからね、君の樣子を見に來たのぢやないか。だがハイカラの女と散步してる位だから、安心しちやつた。新しいのをぼつ〳〵拵へて、愉快にやりたまへ。」と二三步放れた。

「おい、怒ちや可かんよ。」

「何有、怒るもんかい。何れ緩くり會はう。……ぢやア、失敬！」と花子の方へ一寸眼を投げて置いて、卷莨をぱく〳〵燻しつゝ多羅尾は行つて了つた。

先刻から遠くで花子は、何くれ樣子を窺つてゐたが、宮井の側へ寄ッて、
「何う云ふ方ですの？」と油斷なく問ふ。
「え、多羅尾と云ふ移民會社の社員です。私の非常な恩人ですな。」
「あの、さう、……。」と彼女は赤くなつて、彼の人が多羅尾さんかと危く云ひかけたのを、辛々揉消して、
「何でしたら、神田の古本屋へ行つて見ませうか、お疲れでなけりや。」と、、、、どぎまぎ話頭を變へた。
「疲れるやうな柄ではありませんがね。……。」と今一息澁つてゐる。
「そんなら行きませうよ、私、少々買ひたいものがありますから。」
「それではお供しませう。」
「またお供ですか、おほほゝ……。何うも貴方には……。」と笑つて、

もつと打解けられよと、云つたふうな顏をした。
旋て彼等は蝶のやうに柳の糸に縋れつゝ濠端を一橋へ出た。

二の二

途々色んな宗教書の談話が出たが、宮井は未だ餘り讀んで居らぬので、花子の該博な英書の紹介には、著者の名すら覺えかねて、只管肩身が窄まる、やうに感じたのである。
「山邊さん、私は駄目です。」
「駄目ッて、何をおッしやるの？」
「何時か和田先生に話さうと思つてるのですが、貴女、お聽き下さいますか。」

「そら、伺ひますとも、私もお話しがあるのよ。ですから、お茶でも飲んで行きませう！」

花子は只あるケーキホールへ彼を導いた。階下は普通の菓子店で、二階がミルクホールと同じやうな體裁にしてある。彼岸櫻の投挿しの花瓶、厭に挑發的な美人畫の壁額が其の粧飾である。客の好みに依つて、和洋の菓子や果實、紅茶に珈琲、正宗もくれと云つたら出しさうな頗る如何はしい場席だが、彼女は一向平氣で、プロンケーキと紅茶を命じた。

「可笑しな處ですね。」

「是れが社會でせうよ。さア召上れ。」

宮井は彼女に對向ふと、妙に氣が後れて了ふ。動ともすると眼は光る、襟止は光る、時計の鎖は光る、指環が光つて、目映くて仕方がない。併し此

れは花子に昨今稀な現象である。

「時に先刻のお話しは、……？」

「さうですな、何分信仰が零ですから。」

「そら誰だッて弱いわ、人間ですもの。だけどもね、宮井さん、貴方のやうにさう謙遜ばかりなすつちや可けませんよ。消極的は人間の大毒！」

「えゝ。」

「もッとアクチブにおなんなさいよ。」

「でも事實ですから。」と幾乎むきになつて、

「若し私が解つてると云つたら、其れは僞善でせう。」

「だッて貴方は、日外あんなに立派な感話をなすつたぢやありませんか。それですに……。」

「彼れですか、困つたですな。輕々しく喋つたンで、悔いてます。受洗したのも早過ぎた、牧師の好意に甘へたのだが。」と急込んで云ふ。

「何故貴方はそんなこと仰有るの？　私が惡うございました。」花子は心して飲ました藥が餘り利過ぎたので、聊か陷んだ。

「奈何して貴女がお惡いものですか、それよりか私の斯う云ふ理由を申しませう。例へばね、旅行に惱んで宿もなく、パンもない場合にですな。私は再三其の難に遇つたが、其の時の人間の慾望は、只食ひたいのと安らかに眠りたいばかりですよ。そして辛々其の食に有りついたら、麵麭の屑でも無上の美味に打たれる。けれども其れは永續的なものではない。實に不健全な味ひでせう。そんな感想を以つて、全般を律しちや妄ですな。私の宗教的情緒も夫れに些とも異りませんよ。甚だ不健全な經驗を公言して、

恐縮でした。要之窮して天に叫んだのですからね、今日ぢや叫ぶやうな場合の起らぬことを望んでゐるのです。……」

「鳥渡お待ちよ、そりや……」

「ですが、もう少しお聽き下さい。兎に角私のやうな者では、クリスチャンと云ふて居れない。目下境遇が惡いから、詮方なしに斯う我慢してゐるものゝ、他日若し地位が出來たら、未信者同樣に、美味い物も喰ひたからうし、立派な家にも住んで見たいです。人の愛にも饑ゑてますよ。地につくものは凡て犧牲にせねばならぬ筈だが、私には到底實行されそうないから、實は奈何しやうかと煩悶してるのです。」と云ひ足らなさうに、角張つた顏を撫でた。

花子は其の言葉の終るを待つて、色々彼の思ひ過ごしなることを指摘した。

そら人間は薄弱な者だから、中々聖書の示すやうには行かないが、次第に聖化されるのだ。而して基督教は何も禁慾主義の宗教ではない。愛の宗教である。主イエスがカナの婚筵で、最初の奇蹟をなされたのでも、其の一斑が解ると。

表には電車が轟々通つてある。向ふの方で給仕人が窓日に當りつゝ暖かさうに居睡つてゐる。宮井は蒸然考込んでゐた。

彼女は紅茶を啜りながら、

「眞實に貴女は同情に堪へぬ方ね。」と調子を變へて云つた。

「……。」

「そりや御無理もないわ。あんな熱烈な戀に背かれて被居るのだもの。……でもね、宮井さん、人は出來る丈け善意に解して、過去は忘れ

るンですよ。覆水盆に復らずだから。」と危みつゝ當つて見る。

宮井の頰には血潮が上つた。まさか事實は知るまいが、想像を逞しくして擔ぐのであらうと、譯もなく虛勢を張る。

すると彼女は樣子を斟酌つて、徐にそれと切出した。抑も花子が今日彼をこんな處へ誘ふた目的は、其の邊にある。昨日彼女は豐子に意外な戀物語を聽いて、其の情の深さ細やかさに、一入彼を慕しく思つた。豐子を憐まぬでもないか、何の道實の結ばるべき愛ではない。姦婬の故ならで、夫婦の離別は罪惡中の罪惡であると理屈を附けて、其の情は抑へて了ふ。が、若し豐子が教會へ來たら、――それは屢々勸めたことだから、――直ぐ分かる。でなくとも早晩知られる事柄だ。そしたら、二人は勢ひ接近する。豐子の意氣込みでは、其の何時が判からない。焚ぼッ杭に火の着くのは、

自然の傾向である。さすれば、假令怨恨を買つても、折角救はれた宮井を夫のある婦人に交らせてはならぬ。多分愛想を盡かしてゐやうから、彼女に憎むべき點のない因果を含めて、未練なく他へ精神を向けさせるに限る。其れには、子供の喧嘩を止めるよりは爲ろと云つた方が好結果を收めるやうに、此方から度胸よく打つて出て、内密に交通の開かれぬ豫防をするが可い。でないと、靈魂の死活に係るといふやうな、宗教的に暈した曖昧な思想を有つて來たのである。

「……そんな譯でね、私は豐子さんと姉妹同樣なのよ。彼の人が此頃欝ぎきつてますから、可哀想でならないけれど、今更どうも仕方がないの。それでね、貴方、其處は十分察してお遣んなさいよ。貴方のお音信はないし、家兄は亡くなるし、家を嗣がねばならぬのでせう。それやこれやで到頭あゝ心を殺して了つたのですから、何うぞ彼の人を恨まないで頂戴よ。而してね、お互に肉を放れた清い交際をなさいましな。そしたら、餘り極端な事を仰有らなくッても濟みますから。」と頗る婉曲に操つた。

「僕ア何も豐子を恨んぢや居らぬです。」と齒を咬〆めて、宮井の云ふ聲は怪しく震ふ。

「さう、……、でせうとも、私、其れ聞いて安心してよ。」と彼女は眞赧な顔になる。

何時の間にか數名の書生が隣席へ來てゐたので、二人は冷やり其處を立つた。

二の三

彼等は神保町の古本屋で、四五冊の書籍を買込んだ。而して花子に來遊を勸められて、宮井はつい其の氣になつた。電車の途中で彼女が色々話しかけるのを、生返辭しつゝこんなに彼は考へた。此の人が豐子の親友であつたとは、夢にも思はなかつた。實に寢耳に水の吃驚だが、其の驚愕よりも慚愧さの念が強い。こんなことで、奈何して彼女が忘られやう？　此の破れた戀の殘つてある內は、信仰も新生涯も覺束ないと惱んでゐた。けれど花子の云ふやうに、肉を放れた高潔な交際をすりや可い。成程さうだ。敢て節操の汚れた醜體を抱かうとは思はぬ。只此の胸の——愛してゐる、愛されてゐるの情緒さへ言葉に現はして、交換すれば滿足する。それには豐子の周圍の者が惡いから、花子に其の執持を賴まう。而して彼女も亦クリスチャンになつてくれや、此の上ない幸福だ。二人の友なる花子が、其れ

を望んでゐるのだもの。何ぼ失敗續きの自分でも、こればかりは成功するだらうと。

花子は彼を書齋へ導いて、心を籠めた歓待をする。風呂が立つてあるので、

「何でしたら、一浴みなさいましな。」とにッこり云つた。

「ハア、難有う。併し私は結構です。」

「今ならそんなに穢かありませんよ。」

「いえ、何うしまして（と頭を搔きながら）どうぞ貴女、お構ひなく。」彼は口を歪めて氣の毒がる。

「さう、では一寸失禮申しますよ。こんなものでもお讀みなさいまし、詰りませんけれど。」と英語雜誌を一冊彼の前に出して置いて、花子は彼方へ行つたのである。

傍の總桐の机の上には、筆記帳が一山、洋書が二三冊と聖書や讃美歌がちんまり重ねてある。インキ壺に筆立硯箱、何れも粗末なものは見當らない。硝子戸の本箱に美しい詩集などが詰めてあつて、其の上に西洋の紳士淑女の寫眞が數枚凭らしてあつた。

宮井は其の雜誌を何氣なく覗いた。すると、テニソン卿原作、イノックアーデンの講義、パチエラーオブアーツ、山邊花子と云ふ標題が逸早く眼に止つた。既に井回近くに及んであつて、末尾の方が少しばかり載せてある。

There Enoch spoke no word to any one,
But homeward—home—what home? had he a home?
His home, he walked. Bright was that afternoon,
Sunny but chill; till drawn thro' either chasm,

* * * * *

イノックが永の漂泊から歸つて、懐しの妻を訪ひ行く光景である。宮井は此の詩程の感化を享けた文學はないと思つてゐる位で、今更見たくなかつたが、記者への興味上注意して讀んだ。原文を掲げた次へ辯句の解釋を施して、其れから半ば韻文體の意譯を附けて置く。……『イノックは誰に言葉を交はしもせで、あやに家路を急ぎける。さて我が家とは如何なる家ぞ？　彼は我が家を持ちにしか、我が家へ彼は歩を向けぬ。晴れぬれど其の日の午後は風寒く、身に泌む内に彼方なる、海より雲霧襲ひ來て、此處の二つの浦邊をば、たゝ灰色になし了んぬ。……。』

宮井は忘られぬ記憶を喚起されて、萎然物思ひに沈まざるを得なかつた。電燈の點火たのも、花子が湯から上つて、薄すり化粧つて出て來たのも氣

* * * * *

附かずにゐた。

「何を考へて被居るの？　宮井さん、どうも失禮を。」

「えゝ。」と吃驚して、

「何有、イノックアーデンに感服したのですよ。」と努めて平氣に云ふ。

「まア、……、可笑しな譯でせう。何か御同感の事があつて？」と意味ありげな眼をくれる。

「隨分ありますな、……。だが薩張滿りません。」

「若しお有ンなすつたら、そんなに仰有らないで、お話しなさいましな。何かの參考になりますから。」

「參考どころか胡盧でせう。」

「いゝえ、……。あの、伊豆の別莊でね、……、ねえ、さうでせう。」と顔が赧い。

「こりや酷い、貴女はすつかり知つて被居る。」

と彼も亦顔を赧めて、兩手で頭を抱へた。

「知るもんですか。ですからどうぞお聽かし下さいまし。」と媚るやうな態をする。

「可けません。〳〵（と首を振りながら）そりや貴女、餘り可哀想ですよ。」

「さう、では何れまたねえ、おほゝゝ……。」と無意味な笑ひに紛らした。

其處へ晩餐の膳が運ばれた。宮井は辭退して歸らうとしたが、何だか顧慮かつたので、遠慮なく其の經應を受けたのである。

二の四

此處の晩餐後は愉快なもので、家内中が面白く語合ふ。今宵は花子の書齋へ集つて、卓を圍んだ。尤も千代野や初子は客の手前を稍はにかんで居る。

「姉さん、南米のお話しが伺ひたいわね。」

「さう、では宮井様にお頼みよ。」

「だつて、貴女……。」千代野はメリンスの羽織の袖を咬へた。

「南米談ですか、困りましたな。」宮井は迷惑さうにする。

「南米のお話しはね、貴女達には餘り……。」

「高尚過ぎて？」

「まア、さうね。」

「何うしまして、そんなぢやないです。」と彼はやつきになる。

「それよりか初子さん、貴女の紹畵をお目に懸けなさいな。」

「私の……？」とまア厭だと云つたやうな顔で、初子は彼女を見た。

「それがよくつてよ。」と音樂家が合槌を打つ。

「御覽なさるやうな……。」と丸々肥つたのが尙更ふくれる。

「何卒、拜まして下さい。」

「あら、拜ましてだつて、おほほゝ……。」と低う笑つて、千代野は出しに行きかける。

「まア、貴女てば……。」と閨秀畵家は後を逐ふた。

「奈何です、賑かでせう。」

「結構ですな、色々今日は難有うございました。」

「いゝえ、またちよい〳〵來らつしやいよ。」花子は手の甲を向けて、ルビーの指環を煌めかした。

旋て千代野が壽仙紙や唐紙を抱へて來た。初子は恥らうてか、怖としてか、姿を匿したが、彼女は我が物顔に見せる。大抵は花鳥などの稽古書で、師匠の粉本通り寫したに止まつてある。謟ふ才能に缺けた宮井は、其の中の多少見られるのを抽出して、努めて賞揚してゐた。

折柄若槻が訪れて、此處へ通つたので、隱れてゐた初子は、どたばた繪畫を仕舞ひに來た。千代野も手傳ふ。

「仕舞はなくッても可い、どれ見てやらう。」

「厭よ、貴方に懸けちや。」と大騒で二人が持つて逃げた。

其處で宮井は彼に挨拶をした。若槻は無作法な振舞で、グイと座蒲團を引いて、胡座をかく。痩形の顏を撫でながら、

「先日の南米談をもッと聽かさんか。君は詩才があるから、大に話せる。」

「いえ、……。」

「秘露には龍血樹が澤山あるだらう。ね、君。根元は七十呎以上だと云ふから素敵だ。カルホルニヤ洲のマンモスも其の比にあらずですせ、山邊さん。」

「さう、でもマンモスは幹の直徑が其の位あるのですッて。」

「ふん、併しありや百合科さ。何しろ南北兩米通の寄合ひと來てるな。僕が一番バナマの地峽になつて、双方の消息を聽かうかい。……、僕もね、山邊さん、此の夏にや行くかも知れんよ、多少趣味の合つた連がある

「そりや何方へ？」

「先づ合衆國でさア、何なら南米へ行つても可い。苟も我々仲間の者が

アマゾン流域の一つも跋渉して居らないぢや妄さ。雄大なる自然美に觸れもしないで、氣の利いた作品の出來ないのは當然だよ」と肩を搖つて、

「何だッてね、宮井君、安低斯山脈の墜道が貫通したつていふぢやないか。近着の雜誌に書いてあつたッけが、さうなると、太平洋太西洋は一跨だ。文明の利器も馬鹿にならんッて。」と獨で喋る。

宮井は煙に捲かれてゐた。

「貴方は白館から招待狀が來ないぢや行かないのぢやなくッて。」

「やられたなア、時にマガレット(千代野)は何處へ行つたい。」

「さうね。」

「あんな先生達でも高野山へ參詣するかね、どんな顏して跼んでるだらう。塗立てた念入りの手前もあらうぢやないか、一杯見たいもンだ。」

「あら厭だ、そんなに見たけりや、豚になつて、支那へお行きよ。」と彼を睨まへた。

「支那よりか何處かに、W、Cの硝子張がないか知ら。はゝは……。」と平氣で嘯いてゐる。宮井も苦笑せざるを得なかつた。

程なく若槻は「何うも失敬。」と次の室へ行つた。彼は多少千代野に意がある。

後で花子は、

「失敬な人ね、法螺の蓄音器ですから、お氣になさいましなよ。」

「いや中々壯快な方です。ですが私はこれで失禮します。」と腰を浮かせた。

「まア、お宜しいぢやございませんか。お茶でも煎れかへますから、御緩くりなさいよ。」

花子は彼を強つて引留めた。而して宮井の生活上のことなどに就いて、樣々の忠告を與へた。牧師が神學を修めたら、何より重壁だと云つてゐたとも、傳へたのであつた。

三の一

眞面目な戀は往々深刻な悲劇に終る。何故さうなるのであらう？　魚心には水心のあるものを。尤も感謝と愛、義理と情の併立しない場合はあるが、一つは境遇が戀を紛糾せしめて、遂に悲慘に導くのではあるまいか。手を伸べて得られる花なら、餘り憬れはせぬ。其れを周圍が邪魔をして、求むれど得られぬやうにするから、得られぬものはいよゝ欲しさに悶へる。其れが度を過すと、もうどんな滿らぬものにでも斷念し能はない。叶はぬ戀

は永遠に醒めざる毒杯の醉である。

元來宮井はさう戀に浮身を窶すやうな男ではなかつた。偶然豐子に汽車で出會つて、美しい女だなアと、泌々感服した位に止つてあつたが、彼の境遇は激變を來した。去る年悲報を受けて歸宅して見ると、一家は不幸の最底に沈んである。急用を帶びて彼は或る日大阪へ赴く途中、生憎汽車が眞際に出て了つたので、次列車は遲し、雨の日の夕暮は俥がないから、四里の道を餘儀なく歩いた。雨はいよ〳〵降りしきる、青田の畔に螢は飛んでゐた。氣は苛立つが、積日の疲勞で彼の里程は渉取らない。淀河へ着いた時分には、最早渡船がなかつた。梅田の停車場は眼前に見えてあり、電燈の光輝は晝のやう、人馬の響きは手に取りながら、宮井は茫然岸邊に立つた。

平素の橋は河の流れの底で、凄まじい水音だ。是れから長柄へ廻るより外はないが、半道餘の墓場を越えて、一里半の迂回になる。池田の家に戻らうか、それでは急用が調はぬ。矢張歩いたのが惡かつたと、悔んでも仕方はない。もう斯うなれば是非がないから、行かれるだけ渡つて見やうと、彼は自暴に滔然飛込んだ。が、何分激流は腰まで浸す、踏えた石は逃げる、杖にした雨傘は水を含んで去りかける。其の都度體が攫はれさうなので、足はわな〳〵顫ふ、手はぶる〳〵縮むのだ。で、進退頓に谷まつて、眼的の往來安全の瓦斯燈もちらつき出した。其の時彼は最早ちぬの浦の藻屑になつたかと思はされた。さうなると、人間はまた不思議に度胸の据るものだ。彼は傘を捨て衣を流して、丸裸で五六歩進んだが、幸ひ瀬が淺くなつて來て、辛くも溺死を免かれたのである。其の彼岸に達して、彼は無意識

に『豐子さん』と叫んだ。そして彼女の姿をあり〳〵と見た。奈何云ふ心の作用でさうなつた？　彼に潜在してあつたものは、唯一度汽車中で乘合して、他人の會話から豐子の名を覺えてゐたゞけである。けれど彼は其れを想起す毎に、無限の感慨に打たれるのであつた。

此の神秘な一點の愛火に觸れて、宮井は母に先立たれ、父に身罷られ、只つた一人の實姉には悲慘な最後を遂げさせ、相當な財産は親戚の貪慾の贄になつた悲境を、案外希望の裡に切拔けた。辛く敗殘の一家を整理して、翌年の一月再び東上したのである。而して區役所の腰辨になつて、其の餘暇に或る夜學校で語學の完成を努めつゝあつたが、元より憤激に堪へぬ身の、腕を扼して熱涙潸然たるものが多い。高等商業の生徒を見る度に肩身を窄めた。母を慕ひ、父を偲び、親子一族の不遇を嘆ち、奸商竹川の猾

惡を怨んで、夢結ばれぬ夜は數あつた。日頃の素志は屢々消えて、とつおひて人生を儚んだ。其の解決を宗教に求めて見たが、何故か徹底した信仰は得られなかつた。彼の和田牧師を知つたのは、其の頃のことである。彼は半年餘の月日を送つた。其の間に豐子の所在を確め其の地位を窺ふて、徒に天の高さを覺えた。それよりも清き小川に映る星影を眺めてゐる方が可いと思つてゐた。けれど來るべき運命は來らずには止まぬ。

一日彼は午後から小石川の植物園に杖を曳いた。其の日は稀な好天氣なので、優にやさしい秋草の種々を喜んで觀た。樫や、犬楠や、八ッ手や、色づき初めた紅葉が混つて、奥幽しい深山の趣の出た只ある四阿屋に、彼は腰掛けてゐた。澄み切つた大空には、ちらほら薄雲が散らばつて、緑の牧場に羊が眠そびたやう、世界がも一つあるらしい。目先に大塚の高臺が

展けて、庭樹の中から家がぬく〳〵出てある。柔軟な日光は屋根瓦に煌めく、下の池に蓮の枯葉が風に搖ぐ。前栽の結構さは、そゝろ封建時代の俤が偲ばれた。木犀がふんはり甘い香を送つて來る、四十雀や名は知らぬ小鳥の清らかな囀りが聞える。其の心地の佳さは、宮井をして少時恍惚たらしめた。

『一寸、待つてゝ頂戴よ。私、忘物をしたから。』

『何を?』

『あの、手巾なのよ。』

『さう、では私も行くわ。……まア、彼の人てば。』

此の對話で宮井は美的忘我から醒めて、聲する方へ振向いた。紫勝の矢絣に、カシミヤの袴を穿いた花恥らひの處女だ。彼女は友を待たむと亭へ

來たのであらうが、計らず人がゐたので、はッと柱の裏へ隱れた。が、宮井の眼にはそれと映つて、血管は一時に漲つた。けれど何うして彼に此の好機が逸されやう？　天女は咫尺に天降つてゐる。『豐子さん』と彼は夢中に駈寄つたのであつた。

『あーれ。』と豐子は叫ばなかつた。眤と彼の顏を見て、ぐつと手を振放して、眞紅になつて逃げて行つた。同時に宮井は失敗つた、惡いことをしたと胸を騷がした。近くに園丁が落葉を掻いてゐた。後追ふ譯には尙更いかなかつた。

其の夜宮井は、今日の謝罪の手段が外にないといふ前置の許に、過去の感情を誇張した艶書を送つた。其の返辭は無論なかつたが、再び手紙を出した數日後のことだ。彼は麹町の電車通りを歸つて來ると、半町程先の雜貨

店の舗飾を視てゐるやうで、此方へ眼を遣つてゐて、さッと赧まつて、たゞ〳〵平河町の方へ一度振向いて置いて、豐子は廻つた。伴も連れない唯の一人である。彼は胸を躍して、これは逢つてくれるのだなア、夢ではないかと自分を抓つて見た。さア然うなると、奈何歩いてゐるのか判らない。只最う豐子の方へ嬉しさ怖さで曳かれて行く。彼女は爪先を押へて、小石を飛ばして急いだ。大方怖くなつたのであらう。影が細う映る。人は厭に通る。宮井は氣の毒がつて、齒痒く思つた。十數歩の距離を續けて、紀尾井町まで來て、だら〳〵坂で行越さうとして、其の擦違ひ際に、彼は獸つて叩頭をした。

『ハッ。』とたぢろいて、豐子は燃した頰を小豆茶の被布の袖で。

『僕は實に失禮を重ねて居ります。どうぞ許して下さい。』

『……。』

『貴嬢、僕の切ない衷情を察して、暫時話してくれませんか。』と力一杯で云つて、彼女の動止を窺つた。

豐子は首肯いて彼の素振を見てゐる。で、彼は清水谷の松林へ豐子を導いたのである。

宮井は自分の不可思議な運命を語つて、熱烈な戀を告げた。美しい夕榮の雲は、西の空に彩られてあつた。一時間程も話したであらう。

『……、ですから、僕は其の後奈何しても貴嬢が忘れられなかつたのです。僕が絶望の淵から救出されたのは、貴嬢のお蔭ですよ。どうかお察し下さい。僕は虚言の言へない男です。』

豐子は涙含んで聽いてゐた。

『貴嬢、許して下さいよ。』

『いえ、もう……。』

『無禮な奴だと思召したでせうが、……。』

『あの、何うしまして、……あの、私、嬉しいわ。だけども……。』

『だけども、何ですか。』

『嬉しいのだけれど、貴方の其の深い愛には、私のやうな卑しい者に報ひられ……。』

『え、貴嬢が卑しい!?』と我れ知らず詰寄つた。

『乘てちや厭よ。』嗚呼、熱ばつた手と手が觸れたのであつた。

三の二

宮井は間もなく區役所の腰辨を辭して、一心に繪筆を握るやうになつた。元より美術家の天禀ではないが、圖畫は中學時代の得意の課目の一つで、多少物の象を現はす才能を有つてゐた。其れが希望に滿々た破竹の勢ひで描くのだから、魅せられてゐる豐子の眼を喜ばす位な繪は出來た。未來の美術家と深窓に育つた處女との戀は順境に進んだ。其の結果宮井は非常な自信を起して、精神一到何事か成らざらんの格言は、恰も自分の爲めに殘されたかのやうに思つた。が、好事魔多しとは昔から繰返した言葉で、程なく社會の壓迫が猛烈に襲ふて來た。或る日彼女の父錦之助に喚出されて、散々侮辱を蒙つた揚句、豐子との交際を嚴乎謝絶られたのである。此の不見目な刺激を受けて、宮井はこんなに考へた。益々美術を研究して、彼に慙愧の念を起さしめる乎、それとも少時志望を枉げて、奮然巨萬の富

を造つて、彼を眼下に睥睨する乎、或は蛇の如く附纏ふ乎と、彼の南米行は、こんな苦悶の裡に胚胎した。頃は移民問題の勃起した當時で、募集廣告が其處此處の電信柱から招いてゐた。豐子は父の壓制が如何に强からうとも斷じて心變りはせぬ。貴方に棄てられる位なら、不如殺して貰ひたい、若し何時迄も愛して下さるならば、假令五年が十年でも待つてゐると勵ました。で、彼は再び深い愛を得て、勇氣百倍、剴切淋漓の樣であつた。僅に殘つてある家屋敷を賣拂つて、恥辱も外聞も村人の忠告も、悉く前途の希望に欺かれて、自由移民に決したのであつた。

其の年の五月に新橋を出發したので、豐子は窃に見送つて來て、汽車の中で色々世話をやきながら、

『必然待つてますから、どうぞお壯健で歸つて頂戴よ。』と云ひつゝ指環を

密と彼の手に欽めた。

『何有、大丈夫さ。成功は奮闘兒の月桂冠だ。』

『でもね、宮井さん、餘り冒險なすつちや可けなくッてよ。』

『多少は免がれまいッて、はアはア……。僕は貴嬢の愛に生きてる。』

『私は御無事を祈りますけれど、成功よりかお體をねえ。』と潸々涙を流してゐた。

斯て宮井は、八千餘哩彼方の甘蔗畑に働く身になつた。幸ひ氣候や風土の激變に堪へて、牛馬のやうに勞働したが、周圍の樣子が明るくなるにつれて、失望せざるを得なかつた。自體秘露の海岸地方は、支那人が優勢を占めてゐて、我が同胞は其の風下なので、色んな凌辱を忍ばねばならず、歐米の資本家は野蠻人と同視して苛酷に取扱ふ。そして日給は僅に一圓内外だ。體質の弱い者は風土病に罹つて斃れる。血氣な男は不平を酒にやつて、雇主に喧嘩を吹掛ける始末、宮井は前途の悲觀をいよ／＼深くした。

是れは何うしても日本人が自由の天地を得ずばならぬが、其れにはモンタナ洲の千里の沃野に赴くの外はない。其處は海面を拔く五六千尺の高地であつて、大氣新鮮最も外人の健康に適すと聞いてゐた。何は兎もあれ一度視察を遂げて、然る後殖民地の基礎を築かうと、彼は邦人間に遊説して、辛く二名の同志を得た。彼等が里馬府を立つたのは、母國を去りし二年後であつた。

一行三人は熱帶より温帶に移つて、直に寒帶の烈風に曝れるが如き悲壯な羇旅を續けた。一夜をクズコの舊都に憩ふて、翌日は人間の矜誇と零落を物語る歴史の片影を眺めて、インカ帝國の今は昔の隆盛を偲び、荒寥な

廢墟の石壁を踏越え、ゴロ〳〵した道の花崗石に馬の歩行を妨げられつゝ進む程に、白雪皚々たるコルヂルレラ連峯は眼前に聳えて來た。嗚呼、モンタナ洲は最早數日の旅になつたのである。宮井は既に到るべき地の自然の大寶庫を提げた心地して、勇み喜んでゐたが、折柄背後より逐ひ來る人勢があつた、彼等はインカの壯年輩で、勇敢なる日本人よ、願くは來りて、我が黨の主張を遂げしめよと、武具を呈して强請り且つ逼るのだ。宮井等は意を枉げて、彼等に從はねばならぬ羽目になつた。

尤も宮井には、茲に一つの野心があつた。元來インカスは時の政府に反抗しつゝある民黨で、彼等の熱望せる大統領を其の黨に得させんか、白哲人の跋扈は過半消滅する。而して彼等の邦人に期待する處は豫想以上だ。然らば目的を手段に捧げて、一擧秘露の天地を我が有にせん。新日本の建設

の日や近しと、空想場裡に里馬府へ逆行した。が、思はざりき、世界の趨勢を。彼には未だ十分社會を觀る明がなかつた。只一片の客氣に擒はれて無智蒙昧な野蠻人の味方をしたところが、何の好果が得られやう？　一人の友は行方不明になる、他は憐れ戰場の露と消える、彼は無念纍紲の汚辱を受けた。豐子を喜ばせやうとの愛の動機では、凡てが餘りに詩的な突飛であつた。

但し脱獄は容易に出來ないのでもなかつた。最初民黨の袖領マンムと同房されたが、彼は其の經驗に富んだ男で、早速獄卒を買收して逃走の手筈を定めた。けれど彼には豐子の情の籠つた指環の外賄賂すべき何物もない。と云つて、其れはどうも放されぬし、獄卒は彼の何等かを得なくば諾はぬので、マンムは折返し彼を連出しに來ると堅く約して、其の夜竊に出奔し

た。夫れまでは可かつたが、翌朝マンムの不在が發覺して、大騒動が惹起つた。宮井は破獄者の同類の如く見做されて、理不盡に地下室へ投込れたのである。

三の三

宮井は日々石のやうな黒パン二片と、スープ一杯で辛くも露命を繋いで、囹圄の苦楚を備に嘗めた。多羅尾等が盡力して救出した時分には、最早眼も當てられぬまでに窶れてゐた。二三箇月間里馬の日本人倶樂部で靜養せねばならなかつたが、多羅尾は徐ろに豐子の樣子を語つて、君の歸朝を鶴首して待つてゐる。早く結婚式を擧げて、元氣挽回、舊倍の活動をせよと勵した。けれど彼は殆んど一切を否定する、餘りに焦り過ぎて、身を苦し

めるばかりであつた。噫、實に人生は徒勞だ、もう大望は懷くまいと云ふ觀念が强かつた。多羅尾が豐子に通信するが可いと勸めても、彼は二三度やつたが、何の返信も來なかつた。多分彼女の父が妨害するのだらうから、舍してくれ。待つてゐるものなら、何時迄も待つてゐる筈だと呟々揑た。が、次第に體力が回復するにつれて、儚ない希望は浮ばぬでもない。冲天の意氣で渡來したに引替へて、忌はしい重傷をのみ負ふた歸朝は辛いけれど、矢の如き歸心は湧いて來た。で、永の航路を焦躁がつて、多羅尾等と倶に母國の土を踏だのは、去る一月の中旬であつた。

直に其由を豐子に報じて、氣もそゞろ彼は新橋へ着いたが、若し彼女が昔ながらの豐子なら、出迎ひに位は來てゐやうと思つたに、彼女の姿はプラツトホームに見えなかつた。彼の若しやは現實に近づいた。最早俥を飛ば

すだけの勇氣がないので、自働電話で夫れとなく聞いて見ると、

『あの、奥様は大浦の別荘へお出でになつてますが、貴方は誰方です？』

と女らしい聲が答へた。

其れ以上彼は、聞きも答へもする必要はない。奥様の一言で、萬事休した。噫、嗟、自分は何のために苦しんで來たのかと、宮井は身の置處に狼狽へて、或る旅館で多時地蹈鞴踏んだ。南米へ行つたのを敢て彼女の所爲とは云ふまいが、自分が斯くも失敗に終つたのは、全く豐子を愛し過ぎたからだ。それだのに、彼女は自分を賣つてゐる。誓ひを破つて、他人の妻になつて居るのだ。さても憎くや、自分は欺かれた。背かれた。眞心を殺されて了つた。此れが捨てゝ置けやう？　無念の鉦受けて見ろ。……

が併し、――此の併しが彼の今日の生命の源泉である。――が併し豐子を

殺したッて、自分の疵は癒えやせんと、彼は思ひ及んだ。豐子を傷めるには、宮井は餘りに彼女を深く愛してゐる。可愛さ餘つて憎さが百倍とは、高潔ならぬ動物の戀だ。然も又絶望の極自殺するには、彼は餘りに生と強く戰つて來た。自殺に解決を求むる人間は、未だ死に瀕する低の苦い經驗を有せざる弱者である。何は兎もあれ、一度彼女に逢はずに居れぬと、彼は大浦の別荘へ赴く可く靈岸島の汽船に搭じたのであつた。

大浦は伊豆の下田の近郊である。錦之助が未來の別荘地と見込んで、買締めて置く場所だ。宮井は曾て彼の別荘が其處にあると聞いてゐたが、今豐子は何をしてゐるだらうかと、船室の中で人知れず泣いた。翌日の夕景汽船は下田へ着いた。雨がしば〳〵降りしきつて、四邊の陰欝さは彼の精神に調和してあつた。

彼は歩む力も絶々に、道を尋ねて大浦の濱へ出た。三方は黒ずんだ小山に圍はれて、他は靜かげな入江である。空が晴れてあらうものなら、山水の風致心行かうに、そぼふる雨に立て罩められて、暮色暗澹、人の子一人居なかつた。彼方には白い家が幽に見えて、ぽッと火影がちらつき初めた。彼は以前愛讀したイノックアーデンの詩を憶ひ浮べて、波打ち際をよろよろ辿つた。別莊は和洋折衷の構造で、疎な竹垣がしまはしてある。宮井は盜むがやうに近寄つて、燈火の射す窓を窃と覗いた。……其れも一刹那！　彼は直に引返して、岸邊に走つた。室中では豐子と勝文とが、暖爐の傍に語合つて居たのだ。

宮井は汀の岩に幾度乎打突つたが、唯々體が麻痺るばかりで、大勢は如何とも仕方がない。彼は溜息を吐きつゝ只ある小舟の中へ身を投げた。嗚

呼、人生の不如意、冷たさ、寒さ、淋しさは、冬の濱風と吹き荒んで、彼の骨髓に徹した。猛雨は彼の外套を劈かんばかりに降り募る。イノックはアンニーの姿を垣間見て、間もなく死んだが、彼も死なねばならぬ運命であらう？

『神よ、あなたは正義である、愛である。されば憐れなる此の身を護りたまへ。助けたまへ。』と宮井は祈つた。沖の燈臺は暗夜に一微の光明を與へてゐた。

幾時間か經つて、雨は既に歇んであつた。奈何云ふ動機で出て來たのか、豐子は海濱を徘徊ふて、確にそれと知つた。身も世もあらばこそ、

『あーれ、宮井さん。』と叫んだ。潮が滿ちてあつたので、取着く事は出來なかつた。

宮井は愕然立ち上つた。其の拍子に舟はスート波に乘出した。

「宮井さん、私――、信夫さん、私――、あーれ〳〵。」と狂亂の體で、豐子は悶へ苦しむ。

けれど彼は何等の應答もしないで、一命を賭して守つて來た指環を拔いて、其の返辭に代へた。チユーブンと海へ落ちた。

豐子は其處へ飛込まうとしたが、勝文が岩蔭から躍り出て、遣らじと挑んだ。其の葛藤を他所に見て、宮井は悠々沖へ舟を進めた。雨後の月は雲の切れ間に宿つてゐて、こんな始末で悲劇の幕は下りたのである。

其の後宮井は茫然上京して、追想の夥しい永田町のお玉の宅を訪ふた。彼女は宮井を親しく思つてゐたので、久振りの再會を無性に喜んだ。他へは借さぬのだが、彼の爲めに早速二階の座敷を掃除した。雅致の富んだ冠

木門に、生花教授、風柳齋一枝と記した看板の掲げてある小綺麗な家が其れである。

三の四

和田牧師は或る日宮井の寓居を訪ねた。其の時彼は午睡をしてゐたが、大急で顏を洗つて、來客を自分の居室へ迎へた。

一方は大名華族の廣い空屋敷で、向ふの高臺に櫻の老樹が咲き亂れて、其處へ青白く塗つた西洋建の家が見えてある。夜などは燈火がチラ〳〵洩れる。前面の此處の庭には、紫陽花が芽を萠いてゐる。高野竹は四五寸緣先へ覗くのだ。山吹を一杯と、木蘭と小菊をお玉が床の間に生けて置く。

「宛然地上の園樂だね、四圍皆花だ。」と云ひつゝ和田は茶を啜る。

「花を賞する餘裕がなくツて困ります。」

「いや〳〵、さう悲觀しちや可けませんよ。何處までも君の大勇猛心を發揮して、舊倍の奮鬪をなさい。人間は希望を失ふほど、危險なことはないから。」

「ハア、難有うございます。……、ですが、希望は人を欺くものですね。」と沈鬱な聲で云ふ。

和田は此の言葉に甚く失望した。彼は宮井を得難い有力な信徒だと思つて、前途に多大の期待をしてゐたが、薩張豫想が違つてゐる。で、彼は情なさうに黑々した髯を捻りながら、

「何處か惡いのぢやないかね。」と聞いて見た。

「少々不眠症に罹つてます。」

「だからそんな自暴を云ふのだ。どうも健康を損ねてゐちや、厭世的になりやすいから、何なら醫者に診て貰ひなさいよ。時に信仰は奈何ですか、一體。」

「其れが可けないのですね、色々先生の御恩になつて置きながら、實に濟まぬのですが……。」と考へ深い眼を落して、言ひ澁つてゐる。

「私も初中終氣に懸つてはあつたのだが、會堂建築でね、非常に忙しいもんだから、つい怠りました。聖書は研究してますか。」

「はア……。」

「祈禱は……？」

「はア、時々します。」

「そんなら何處が可けないのですか、君は如彼云ふ深刻な實驗をお有ち

から、大丈夫と思つてゐたが。」と稍堅苦しくなる。

「其れが先生、甚だ困つたのです　何分特殊の場合に得た感想ですから、周圍が多少常態に復すると、色んな舊生涯の癖が出て來るのですよ。日外山邊樣のお宅であんな感話をしたのは、惡かつたと思つてます。」

「併しまア、敗れた過去は捨てゝ了つたら何うです。兎に角君は、生活の基礎を築かなくてちや可けませんね。」

「ハア、此の間山邊樣からもさう伺ひましたッけが、……。」

「聞きましたか。」と直ぐ引取つて、

「私は君が此處に居られるのは、善くあるまいと思ふがね、一つ何うです、君は神學校へ行つて見ませんか。」

「さうですな、……。」

「若し然うなすつたら。非常に幸福ですせ。私は窃に神に祈つてゐる。是迄色んな社會と戰つて、十分手腕を揮はれたのだから、一番精神界へ進まれたいと思ふね。他人の靈魂の救ひに與る程尊い事業は、世にまたとないから。」と熱心に勸める。

「何うしまして、先生。」と呟くやうな口調で斥けて、

「私にそんなことは來出ませんよ。靈魂夫れ自身からして疑問ですもの。」

「ちや君は靈魂の不滅を信じないのですか。」

「確には信ぜられないのです。」

「これはまた思ひも寄らぬ說を聞くもんだ。今日聖書の敎に依らないにしても、科學の進步が其れを立證してませう。物質の不滅、況して尊い靈魂に於ておやだ。――、併しまアこんな議論は止さう、私は去年父を亡くし

たがね。」

「ハア。」

「七十三で逝つたのですが、私は其の死に依つて、靈魂の不滅を一層深く確めた。形は放れて見えないけれども、永遠の生命は初中終私の胸に浮んで來る。神の御許に、朝夕清い禮拜を捧げてゐる樣が有々と感ぜられるね。十二の使徒や信仰厚き人々が、主イエスの御昇天後に聖靈の恩化に浴したのは、實に其のいみじき眞理を語つてゐるのですよ。君も御兩親に別れてからそんな感に打たれた經驗があるでせう。」

「そら幾乎ありました。尤も宗教的な意味は薄いのですが、私は時々夢で父母と語合ふことがありますね、(と眼を濕ませながら)父が言ひますのには、お前は實に可哀想な子だ、正直に他人を信じ過ぎるから、毎も失敗す

る。けれども飽まで正直にやれ、俺はそれで一家を破滅にしたが、矢張他人を騙したのよりは仕合だつたと囁くのですな。すると夢は醒めて、涙が滴れて仕樣がないのですよ。母の慈悲深かつたことも屢々想ひます。其れから非常な難關に陷つた場合なんぞは、父が後から私を抱いてゐたやうに感じた機もありました。」と巾手を眼に當てた。

「其處が實に人生の難有いとこですよ。神の生ける愛の働きだ。」和田も細い眼を濕ますのである。

「さうでせうか知ら。けれど其れは私が生存してゐるから、そんなに感じるのぢやないでせうか。」

「いや、其家迄否定する日にやもう仕方がない。君は未だ信仰の日が淺いので、色んな疑惑が起るのだから、兎に角私の忠告を一考なさい。神學校

へでも行つて、眞面目に研究なすつたら、屹度大なる喜悦を得ますよ。閑散は人間を妄想に導く毒藥だ。」

「ハア。」と首筋へ手をやつて、

「色々お言葉を返すやうですが、私には未だ自分の本領が解らぬのですな。精神界の人物だか、物質界の者だか、隨分感情的な處はあつても、到底俗物たるを免れぬと思ひます。」

「それは君の人格が大きいからだ。今に自覺の時が來るよ。時に幾歳でしたッけな。」

「廿八です。」

「未だ若いもんだ、是れからだがね、何しろ生活の基礎をお堅めなさい。」

「生活の基礎より人生の根本問題が解決したうございます。」

「はウ。」和田は小さい吐息をついた。

三の五

お玉が櫻餅を盆に載せて來て、茶を淹れ更へて行つた。和田牧師は銀の片側時計をチョッキの間から出して見て、

「あゝ、浮虛してゐた。」と驚いたやうに云ふ。

「何かお急ぎですか、……。でもまア、一つお上り下さい。」

「難有う、また戴きませう。一寸約束をして置いたからね。」と腰を擡げる。

「どうもお愛想がございませんで、失禮致しました。」

「いや、何うしまして。併し未だ談話の要領は得ないのだが、少し散歩しませんか、宮井さん。」

「さうですな。」

「餘り因循になつちや可けませんぜ。疑問は疑問と少時して置いて、お互に大々的活動をするさ。そしたら君、滿らぬ皮肉なんぞは云つて居れやしない。さア、途々談じるとして、櫻でも見て來やう。」と親しげに打解けて立上つた。

それで宮井は見送る積りで 牧師の後に續いた、外へ出ると、和かな春の日が長閑に曇つてゐて、うつとり甘い氣持に逼られる。毎も花の咲くのを待伏せてゐたかのやうに、意地の惡い旋風が厭に吹くのだが、今日は左程黄な埃は立つてゐない。廻角の支那人の家に、蓄音器が鳴つてゐた。何處かに 篤 の音も聞える。茶色の中高帽子を冠つて、七つ下りのフロックコートで、ステッキを振りつゝ大股にすた〳〵歩む牧師の風體は、腰辨か、

醫者の代診位の型だが、宮井は中々偉い人だと思つた。やがて彼等は公園の入口まで來た。

此の處猥に立入るべからずと、標札した昭忠碑の邊りで、和田は佇んでゐた若い婦人に出會つた。

「長く待つてくれたかね、八重子。」

「いゝえ、つい今しがた來たのよ。」と羞澁んで云ふ。

「さうか、其れは丁度可かつた。――これは小野つて、私の姪です。」と宮井に彼女を紹介した。

二人は場所柄でもあらうが、もぢ〳〵無言の挨拶をした。殊に八重子は頗る初々しい處女で、平元結を懸けた蝶々髷に結ふて、黄ぽい瓦斯織の着物に、友仙縮緬の帶をゞめてゐる。和田が宮井を訪ふてゐる間、彼女は此の

邊の友達を音づれてゐて、此處へ落合つて、一緒に櫻を觀る約束であつたのだ。

一行三人は境内の花曇る、人の群がるお祭騒ぎのやうな中へ入つた。花を觀るのか、觀る人の姿を見るのか、宮井は或る人を見て吃驚した。春日の洩るゝ古びた朱塗の社殿の横手、霏々花の散る木蔭で。

「何うしたね、宮井君。」と和田が云ふのに耳をも籍さないで、彼は雜沓した坂をドシ〳〵降りて行つた。

此の突飛な振舞は、和田に一種の感情を與へた。多少辯明を試みたが、木に竹接いだやうな臨梅で、宮井は彼等に別れて歸宅した。其の時彼の顏色は、お玉が咎める程惡かつた。部屋の中をぶら〳〵歩いたり、頭の毛を拷つたり、萎然仆れたり、水を浴びに行つて、心を靜めやうと、聖書を讀ん

だり、祈禱を捧げたりして、色々悶へたが、咲き匂ふ櫻の蔭で、豐子の姿を見たと思つた印象が、彼の精神を顚覆さずば止まぬのである。

宮井は到頭花子に折入つてお願ひしたい事があるから、明夕參上すると云ふ葉書を出した。其の時刻を待兼ねて、彼は千駄ヶ谷へ行つたが、花子は不在であつた。仕方がないので、次の祈禱會の序に出會つて、話す積りにした。けれど其の機を得なかつた。日曜の禮拜の時もさうであつた。

で、彼は用向を打開けた永い手紙を送つた。日外お話しのあつたやうに、自分は豐子と精神上の交際が爲たい。一度逢つて、凡ての解決を着けない内は、生活の基礎も今一息定まりかねる。こんな弱い申分は我れながら恥入つた次第であるが、境遇の然らしめたものと御同情あつて、這般の斡旋を冀ふ。就ては來る何日參上仕まつりては如何と。

其の返辭は花子から來た。御指定の日は來客がある、其の翌日は外出の先約があるから、お話しの件は當分見合して貰ひたいと、至極冷淡なものであつた。で、宮井は其の遣口に失望して、そんなに勿體振られるなら、自分が直接逢ふまでと、劫を煮してゐたが、今晩來てくれと云ふ音信があつたので、彼は取敢ず不安の念に驅られつゝ出向いたのである。

三の六

今夕は案外丁重に迎へられて、宮井は立派な二階座敷へ通された。ぼか〳〵暖い雨氣の宵である。閉めさした雨戸から擽るやうな南風は入つて來る。庭前の草花の鉢や、疎らな枳殼の生垣の端へ、電燈の光が流れてゐる。星の影は一つも見えぬが、濃く下りた夕の帳の中に、燈火が散らばつて美しかつた。

階下には、笑聲がしてあつても、花子は一向上つて來ない。彼はぼんやり待たされて、倩々肩身を狹う覺えた。如彼云ふ談話がなかつたら、別に賴みはしないのに、斯う持出したからには、成就せぬと氣心が惡い。奈何したら可からう？　今更斷る譯にも行くまいし、……と、樣々考へこんでゐたのである。

「どうぞ貴方、此方へお越し下さりまし。」と多時經つて、玄關番が云ひに來た。

彼は導かるゝ儘に降りたが、ぱッと目映い書齋では、今やピンポーが始まつてある。花子と千代野が躍起になつてゐた。

「宮井さん、どうも失禮！　貴方も一つお演んなさいまし。」花子は手を放

さない。

「旨いのね。」

「あら、失敗つたわ。」

「十一、七。――、十四、九。――、十五、十。――。」とポン〳〵打つて行く。アンパイヤーは初子である。

「まア、憎らしい。おほゝゝほ……。」

「廿、十七！」と千代野の方へ軍扇が上つた。

「どうも可けない、千代野さんにはもう叶はぬね。」

「そら時の僥倖だわと。」彼女は顔を赧めて云ふ。

宮井は荐りに仲間入りを勧められたが、そんな嗜みはないので仕方が無い。四十五六の老姥が珈琲やバナヽなどを持つて來て、色々歓待をする、一方

の勝負は續く。彼は其の打解けた調子を喜んで、僻むものではないと思つた。旋て花子は他を退けて、平氣を裝ひつゝ、

「度々お手紙を難有う。ですがね、彼件は未だ時機が早過ぎてよ。」と一言の許に解答を與へた。

机の脇へ寄つて、照れ隠しに肱を懸けながら彼の動止を呼る。頗る彼女を惱した會合なので、宮井の心を縛つて置いて、其の間に日頃の素志を遂げねばならぬ。多分怒つてゐやうから、斯う〳〵と彼の性質を推測つて、ビンポーの遊戯も倥らぬ彼女の魂膽であらう。宮井はうんざり首垂れてゐた。

「貴方は嘸冷酷な奴だと思召したでせうが、これで私、隨分心配したのよ。何しろ事件が事件ですからね、輕卒なことは出來ませんよ。貴方は大丈夫でも、豐子さんは未信者ですもの。どんな過失が起らぬとも限らないわ。

……、そら、貴方の境遇は察してますとも、ですからこんなに話してゐるのでせう。」

「どうも色々有難うございました。御尤なんですが、兎に角私は一度逢つて見たいのです。」と顔を染めて、眞剣な處を言ひ放つ。

「さう。」と陰險な態度になつて、

「ではお逢ひなさいましな、私は御免蒙りますから。多少は物事をお考へなさるが可い。何ぼ愛し合つて被居る方だつて、然う云ふ方々程尙更注意が要りますわ。まさか貴方は夫のある婦人と結婚したいのぢやありますまいね、おほゝほ。」と氣味の惡い笑を洩らして、口元を袖で掩ふた。

「どうしまして、そんな馬鹿げたことがあるもんですか、幾乎信念も與へられて居ります。」と口惜しさうに顎の骨を動かすのだ。

「そんなら、私のいふやうになさいよ。私が信仰的に考へて、早く彼の人を導いてから、お互に兄弟姉妹の立場で、握手なすつたら可いと思つてますに、貴方は焦つてばかりゐなさる。」と窘めるやうな優晩めをする。

「さう云ふ譯ではないですが、……いやどうも濟みませんでした。貴女の御厚意に從ひますから、何分宜しく……。」と仰向きつゝ云つた。彼は花子につけ〳〵切込まれて、つい其の氣になつた。而して行屆いた道理な話しだと思はされた。こんなに騷いだのは、彼女が想像してゐるやうな理由ではないので、其の說明がしたかつたが、彼の手紙にも省いた通り、餘り神經質な文句だ。八重子が連つてゐたから、若しや其れが豐子の眼に映つたら、どんなに思ふだらう？　氣が揉めて仕樣がないとは、どうも話せなかつた。

「そんなに仰有ると困りますがね、私は何處返も貴方のお爲めを思つて、盡力しませうから、先の樣子も御存知なしに、直接お逢ひなすつたり、お手紙をお出しなすつては可けませんよ。ねえ、宮井さん。」と弟か何かを諭すやうな安排で、指環の手の甲を向けて、此れを持つて行つたら可いと仄めかした。

「其れは決して致しません。」宮井は豐子の件で一心になつてゐる。

「屹度ですか！」

「飽まで誓ひます。」と拳を握つた。

本箱の上の八重櫻の花瓶が笑つてゐた。

四の一

宮井は和田牧師の說敎を聽き了つて、會堂を出掛けると、花子が一寸呼止めた。

「先夜は何うも失禮を。」と云ふ顏は赧い。

「いえ私こそ。」

「彼の時云ふてゐらしたこと、間違はなくッて？」

「そりや無論です。」

「さう、では可うございますがね、私、ほんとに貴方を弟のやうに思つて、盡力するのですから、違約なすつちや全く困るのよ。」

「何うか其の御心配なら止して下さい。私は貴女から望まれても、斷じて誓ひを破りません。」と力を入れて、宮井は立つた。

會衆は夫々散じて行く。彼も花子に別れて、歸途に就いた。此の邊で少時

道連れになる顔觸は大抵定まつてあつて、今日は見えぬが、若槻が居ると毎も快活に話しかけて、何くれ教訓めいた突飛な議論を聽してくれる。他の人も目禮位はして通る。交番の處で、初子と千代野は右へ廻る。其の折々千代野が振向いて、秋波を送る事がある。けれど宮井は何の意味だか解らぬ謎だから、成可く氣を配らないやうにしてゐる。巡査が胡散臭い眼を瞠つてゐる時もあつた。

體の倦い暖かな天氣で、若葉の木蔭は道に映つてゐる。霞のやうな小さい雲雀が大空を滿たすかの如く囀つてゐる。甲武線の踏切を越えて、宮井は代々木の聯隊下を通つて、青山へ出て、色んな空想に耽りつゝ歸宅した。すると二階で、誰かゞお玉と喋つてゐるやうだ。多羅尾が來て居たのであつた。

「やア、何時歸つたね。」

「昨日だよ、教會へかい、馬鹿に緩りだな。」

「あゝ遲くなつた。長く待つてたかね。」

「いや、まア飯をやりたまへ。腹が空いたらう。」

「君は……？」

「僕は濟んだよ。」と卷莨をパク〳〵燻して、眼に笑つてゐる。

「では宮井さん、一寸失禮なすつてお上りなさいましな。」

「えゝ、下へ行かうか。」

「然うなさいまし。」とお玉は降りる。

「ちや君、失敬する。」と彼も續いた。

臺所でお玉は彼の膳を出してやりながら、

「多羅尾さんが色んなことを尋ねてゐらッしやいましたよ。」と探るやうな眼で彼を見る。

「どんなにかね。」と箸を片手に持つて、宮井は小首を傾けた。

「何有ね、貴方に情婦が出來たか、何うかッて。其れはお門が違ひますと云つて上げましたよ。ほゝほゝ。」

「何ぢやつまらない。」彼は喰ひ始めた。

「毎も面白い方ですわね。」と云ひつゝ一服吸附けて、また話しかける。

「大變な苦勞をなすつたンですッてね。妾、多羅尾さんから伺つて、吃驚しましたよ。罪もないのに牢屋へ入つて、まア可哀想に、何てふ災難だつたのでせう。……でもまア、お壯健でお歸りなすつたから可い。」と脆くも涙含む。

彼女は夫に先立たれて、淋しい餘生を送つてゐるので、動ともすると、老の涙を流して泣く。宮井は幾乎馴れてゐるが、牢屋の話しが出ては、兎角氣が滅入り込む。で、胸が塞がり、食慾を奪はれて、彼は二階へ上つた。

「何うだい、厭に蒼い顏してるな。」多羅尾は目聰く認めた。

「何有。色んな談話をしたね、どうか秘密にしてくれたまへよ。僕は一寸暗示を受けても、慄然するから。」と眉を顰めて、胡座を掻く。

「そら然うだらうが、彼の婆さんが頻りに尋ねたからさ。もッと出世をして歸らうと思つてたにとか、毎日快々してるンで心配でならぬとか、問はれて默つて居れんぢやないか。僕が粗と話してやつたら、小母さん、おいおい泣いてたせ。」

「だから尙更困るのだ。……だがまア可い、何處へ出張したかね。」

と話頭を轉じた。

日蔭がぼッと緣先から射込んで、甘い匂の風は颯々入る。遠くに琴の音が聞えてある。隣の空地には、子供等が蝶々を追ふてゐた。多羅尾は、

「中國筋と和歌山縣へ行つて來たよ。(ト茶を啜りながら)應募移民は相變らず盛況だッたが、それより珍無類の吉報を山の如く賚したぜ。先づ第一は、君の股肱であつた彼の岡村の消息さ。素敵に惡運の强い奴ぢやないか。里馬のどさくさ紛れにまた內地へ乘込みやがつて、シーラ地方の豪家のいそ的になつたンだとさ。さうする內に、大事の一人娘が病氣に罹つた。其れを奴さん、萬金丹一服で癒したンだから、捨てゝ措かないやね。言はずと知れた婿殿になりすまして、まんまと財產をせしめたと來てる。此頃ちやちよく〳〵輸送すると見えて、水呑百姓が、一足飛びに、田地を買ふ、

土藏を建てるの大騷だよ。此度行つたら、若干徵發して來やうかなア。何うだい、今昔の感禁じ能はずだらう。」と息を途切らして、笑ひ轉けた。

宮井は和ッともしないで、

「そりや僥倖だつたね、人の運命は解らぬもんだ。」と嘆息する。

「さうとも、君の幸福も今に來るよ。僕が其の鍵を持つてらア。」

「もう擔ぐのは舍せよ。僕一個の不幸なら可いが、他を道連れにするからね。貝塚の方へ出張はしないか、君。僕は一度行かなくちやならぬのだが。」

「あ、奧羽地方は來月廻るかも知れん。だがさう氣を揉むにや當らぬさ、彼だつて萬更犬死ぢやないから。」

「そんな事はない、僕に取つちや。」と早口に云つて、宮井は一文字の眉を

愛め る。

岡村と貝塚は、彼が千辛萬苦を嘗めた同勞の友であつた。其の一人は嘘のやうな風雲に乘してゐるが、片方は屍を異郷の地に曝した。其の時インカスが聊か手當をした位のことで、犬死で無いと云へやう？　宮井自身も出獄の際、多羅尾等の盡力に依て、政府から數百金を得た。それで今日彼は生活してゐるのだが、若し他に資力があつたら、そんな厭な金錢は、棄てて了ふか、貝塚の遺族に與ふべしだと、考へて居るのである。

「おい、さう齒ぎこんぢや可かんよ。是れからがいよ〳〵珍無類の吉報だ。」

と宮井の肩を叩く。

「ふーむ。」

「ふーむなんざ心細いな。僕はもう行かなくちやならぬのだから、簡單に

話すがね、昨日僕が社へ歸つたら、度々大澤から電話を掛けて置いたのさ。豐子が是非共僕に逢つて、懇談したい事があると云ふのだ。大澤の主人の招待も受てるのだから、大概見當が附くだらう。それでね、一應君の意向を確めて置かないぢや、また此の前のやうな間違が起つても困ると思つて、態々尋ねて來たンだよ。だから君、懸直のない處を聽したまへ。」とそはそは立ちかける。

宮井は即答しかねて、熱つた顏を掩ふた。

「君、男らしく賴むぜ、粹の粹たる要點だけで可いから。最早忘れて了つたンか。……まさかそんな事はあるまい、逢ひたいのだらう。」と詰め寄る。

「あ。」と輕く頷いた。

「全くだらうな。」

「無論僕は逢はずに居れぬのだ。」と焦躁さうに言ひ放つ。

「可矣。」多羅尾は手を拍つた。

四の二

多羅尾は大澤家の應接室に通された。待受けられてゐたので、早速念入りの煎茶が出る。西洋の繪入雜誌を持つて來るなど、下には置かぬ疑待だが、豐子や錦之助は一向見えさうもない。四邊は森として、身が引締まるやうに感せられた。

日本流の洋風の十二三疊の間取で、西日が窓の外の檜葉の梢に當つて、ぱッと反射してゐる。壁際には大きなピヤノが据ゑられて、其の上に油繪の

額が一面と、九谷燒の花瓶に白薔薇が綺麗に咲いてある。紫檀の隅棚の置時計は、懶げにチクタク鳴つてゐた。龜甲模樣の絨氈をこつ〳〵踏だり、卓子懸の總をいぢくッたり、安樂椅子に搖ぶられたり、手元の寫眞帖を見たり、繪入雜誌を無意味に繰返したり、將に展かれんとする事件を想像したりして、多羅尾は小半時も待つてゐると、漸々扉がぎイと開いて、豐子は母の園子に伴はれて現はれた。

彼は園子に如才のない初對面の挨拶をした。五十近い年配で、容貌の豐子に酷似した品の佳い痩せた方の夫人である。擧動振り靜やかに、他人の家へでも來たかのやうに座を占めた。豐子はもう胸の騷ぎが包みきれぬ風で、小さく腰掛ける。多羅尾は其の容子の變れてあつたのに驚いた。一つは彼の推測してゐた先入主がさう甚く映すのであらうが、凉しかつた眼眸は拗

ねて、僻んだやうにどんより曇つてある。口元の邊りはうぞ黑く見えて、陰欝な影を宿してゐる。此の前會つた時も其れは勿論苦悶の裡で、嵐に採れた花であつたが、こんなに萎れてはゐなかつた。

「色々豐子がお世話になりましたさうで……。今日は又飛だ御無理をお願ひ申しまして恐入りました。」と苦しさうに園子は云ひ出した。

「いえ、何う致しまして。」彼は落附拂つてゐる。

「私共がほんとに無教育な者ですから、子供の躾方が行屆きませんで、つい大變な間違を起しました。奈何なる事でせうか、それは心配をして居るのでございますよ。」

「そんなに仰られると甚だ恐縮しますが、併し宮井君が不平を懷いてゐやうとか、彼のためにお宅へ今後御迷惑が懸からうとか云ふやうなお氣遣ひ

なら、私が保證しますから、何うぞ御安心下さい。」

「さうですか、決してそんな心配はしてゐないのですよ。豐子が毎もさう申して居ります。大層立派なお方ですッてね、私は未だお目に懸りませんけれど。」と稍打解けて、彼の言葉を遮つた。

「一朝彼が好機を得ましたら、必ずや社會に頭角を顯すでせう。私は多大の望みを囑してゐるのですが、何分懸軻不遇の連續で、實に同情に堪へない男ですな。」

「色んな苦勞をなすつたのでせうね。」と豐子が俯向きつゝ云つた。

「さうですとも、到底お話しになりません。餘り計畫が大きいもんだから、其れ丈強い打擊を受けたのでせうが、一つは愛のために禍を招いたのですね。」と豐子を密と見た。彼女はどッきりして、其の洗つたやうな生際のあ

たりまで赧くなつた。

「どうして斯う世の中はまゝならぬのでせう？　是れも家兄があんなにさへなりませんでしたら、さう云ふお方と何でせうに、……。」とつい愚痴を嘆して、園子は顔を顰めた。多羅尾は弔慰を述べて、一同がどんなにか悲んでゐると、調子を合せたのである。

「今日日の若い人には私共、ほんとに困らされるのですよ。」と彼女は氣を取直して、淋しく笑ふ。

「困らされるやうに社會が導いてゐるのでせう。」、と彼も大に笑つた。

まアと園子は眼を瞠つた。豐子にハイカラな交際をされたので、家庭がメチャ〳〵になつたと云ふ腹が仄見える。

一體彼女は成功者の内君だけあつて、比較的常識に富んだ夫人である。以

前養子を擇ぶに當つて、錦之助が實業界の地位より財産より身分の低のを苦にして、同族に華族がある、貴族があると誇りたさに、仲小路伯爵家の庶子勝文を迎へやうとした。其の時彼女は強く反對したが、錦之助は何かに社會の信用を要する場合の道具だと思つて、嫁にすら遣る積りであつたのだから、到頭我意を通して、間もなく失望を得た。けれど園子は緣あつて來たものだと、回護つて初中終勝文の味方になつてゐたのである。殊に去る一月忌はしい破綻を生じてからの彼女の苦心は非常なもので、豐子は煩悶の餘りひたぶる獨身になりたがる。其れを錦之助は可い事にして、宮井の手紙は期う〳〵で燒棄てたが、そんなに愛してゐるのなら、一番渡りを着けたら何うだい。案外度胸の据つた男だと、自分勝手を輕卒に言ふ。

で、園子は涙ながら良人を諫めた。假令どれほど愛されてゐやうと、斯う

なつた以上は恨みこそすられ、結婚などゝは思ひも寄らぬ。勿論は親の責任は免れぬが、元來豐子がお轉婆であつたのが不運の本だから、男の方で潔く退いてくれたのを幸ひに、奈何しても現狀を維持しないでは、一家の浮沈に係はる。妻の往時の戀人が現はれたので、離緣されたとなつては、勝文の胸も收るまいと、分別を失ふた娘を諭し、世の中を輕く見る利己主義の良人を宥めたのであつた。

併しながら、一旦罅の入つたものは、最早舊の通りでない。媒介人が腹を立てるやら、豐子の始末がつかぬやら、勝文が自妄で逃出すやらで、此の上は無理に緣を繫いで置いても仕方がないと、諦めたのである。而して今では抑へてゐた子の愛に引かされて、豐子の思詰るやうに、只義理立に所夫に別れたと云ふのでは可けないから、若し相變らず親切にして貰へるの

なら、目出度く婚禮をさせて、安心がしたい。入婿の出來ない人だに依つて、世嗣は他から迎へると、錦之助の意見に危みつゝ從ふた。それで今日多羅尾を招いて、氣を勵まして會つたのである。

多羅尾は現代の青年のために多少辯護をしやうと思つたが、初對面の人には餘り無遠慮に過ぎるので、口を噤んでゐた。で、坐は何となく白ける。

園子は靜に立ちあがつて、

「今にやども歸りませうから、何うぞ御緩くり遊ばしまし。……豐さん、切ない事を申しちやなりませんよ。」と云つて置いて、誠に失禮をと彼方へ出て行つた。

四の三

豐子は幾乎嬉しさうになつて、

「私、どんなにかお目に懸たかつたのですよ。……日外態々お越し下すつたのに、宅ではもう〳〵取込んでゐたもんですから、ほんとに失禮致しましたわ。」と香水の芬とする手巾を口元へやる。

「彼の時、貴女は伊豆に被居つたのですね。」

「はア、……、後から爺やに聞きましたのよ。」と情なさうに答へた。

「私は仕方がなかつたから、横町の俥屋へ行つて、夫れとなく樣子を訊いて見たッけが、全く落膽しましたね。以前あゝ云ふお受合ひをして置いたし、相手が宮井君の事だから、何うぞして好結果を得させたいと、それは盡力したのですよ。幸ひ僕の豫言が當つてあつたんで、可かつたけれども、彼を集治監から連出すまでには、大抵の苦心ちやなかつた。それだのに、

是れでは何うも遣切れない。嘸宮井君は失望してゐやう、私を怨んでやうと隨分心配しましたがね。何しろ社の方で忙殺されるもんだから、氣ばかり揉んだのです。するとね、伊豆で死刑の宣告を受けて來た。今後は別世界の人間になつて、新生涯を始める積りだと云ふ端書を寄越したのですな。それで辛と安堵をしたにやしたが、考へて見ると、如何にも殘念で堪りません。貴女は宮井君の手紙を秘露から一度も受取らなかつたのですか。」と聲に力を入れた。

豐子は只點頭のみで、悄々俯向いてゐる。

「だから、彼が手紙は止せと云つたのでせう、併し今更何と云つたつて、仕方がない。」と慰めるのやら呟くのやら解らぬ調子で、卷莨に火を附けた。

其處へ女中が來て、豐子に斯う云ふ。且那樣から電話でございますが、少

少御歸宅が遲うなりますから、お客樣の御都合を伺へと仰せられますと。

「さう、何時頃お歸りだつて？」と彼女は女中の手前を憚るのか、平氣な風を裝ふた。

「あの、七時にはお歸り遊ばすさうにございます。」

「貴方、御都合は如何でせうか。」

「可いですとも。」

「さうですか。――ではね、成可くお早くと云つて置きな。」と女中を退けた。

豐子は此の時間を利用して、日頃の思ひを述べたり、知りたかつた積る話しを聽いたり、一生の希望を遂げるやうに、多羅尾の助力を仰がうと、我れを勵して見たが、餘りに腐心してゐたものだから、唯只胸が騷ぐのみである。こんな苦勞をせねばならぬ身の果敢なさに襲はれた。で、彼女は場

所でも變へたらばと氣附いて、多羅尾を庭の四阿屋へ案內した。

風流な雅致に富んだ四阿屋は、斜平な芝生の高處にある。其處で彼は宮井の暗黑時代の事情や、母國へ伴れ歸つた模樣を薄すり語つた。而して豐子が感慨の餘り悶へるのを見兼ねて、近くの藤棚の下へ遠ざかつた。由緣の色の綺麗な房は、池の底からも亦生えて、緋鯉が云はゞ花の中を游いでゐる。杜若が澤山遣水の邊りに蕾んで、將に美しく笑まんとしてゐた。傾いた日光は藤棚の隙間に洩れて、面白い調和の煌きがある。彼は卷莨を吹かしつゝ手入れの行屆いた植込みをぶら〳〵歩いた。

豐子は思ひ及ばなかつた宮井の深い愛を知つて、或は喜び、或は悲しみ、或は悔んだ。自分の指環を惜んで、醫へやうのない苦役をしてくれたとは、何と云ふ淸い心盡しであらう？　其れだのに、忘れられたと淺薄に考へて、

生命を懸けた誓ひを破つて了つた。伊豆での彼の時も、餘り菅ない素振りだから、取附く島を失ふて、つい此間までは、心ならずも人の妻になつてゐた。以前捕虜乎戰死乎の不見目な事情を聞いてゐながら、其れには思ひを運ばないで、定めし成功をして歸つたのであらう、美しい婦人を娶られやうと、嫉む時すらあつた。若し彼の人の手紙の横領されてあつたのを知らなかつたら、未だに愚圖〳〵してゐないとも計られん。强顏と嘲つたのは、悉皆愛の足りない自分の僻みであつた。嗚呼、どんなに彼の人の心では憎からうぞ、悔しからうぞ、齒痒からうぞ、苦しからうぞ、淋しからうぞ、……と場合を忘れて、豐子は泣き潰れたのである。

けれど彼女は、眞實宮井を愛してゐるとの自信で一路の光明を認めた。斯うなつたのは畢竟境遇に餘儀なくされたので、決して浮いた心ではなかつ

た。其れは隨分冷汗の流れるやうな事を敢てして、恥辱も外聞も忘れた愛の努力を出來るだけ行つてゐる。今日多羅尾に會ふてゐるのも其の一つだが、最初宮井の愛に應じたのが既に業に彼女の大なる犧牲であつた。ついさう成つたとは云ふものゝ、若し彼を刎ね附けて置いたら、何の惱みもなかつたらうに、此の二三年の間には、安らかな日は一日もない程痛い戀の辛さを味はうた。分けて一月からの激しさは非常なもので、二世を契ふた良人に離婚を望ますやうに仕向けた。母の强い反對に打勝つて、到頭家庭の前途を顧みぬ不祥をなさしめた。——もう何うなつても可い、私は死んでも彼の人を愛するわ。——と呟きつゝ彼女は頭を擡げた。夕日は横顏へ照付けて、何時の間にか冷やかな風が吹き荒れてゐる。

「何うですか。」と多羅尾は近寄つて來た。

「どうも失禮致しましたわ。」

「いえ、嘸お困りだつたでせう。餘り一時に喋り過ぎましたからな。だがね、貴女、さう氣を揉んぢや可けませんよ。」と彼女の側へ腰掛けた。

「はア、難有うございます。……宮井樣は嘸怒つて被居るでせうね。」

「何有、そんな事があるもんですか。彼は確に貴女を愛してゐる。献身的に愛してるのだから、何うか貴女も其れに報いてやつて下さい。そしたらお互の幸福です。」

「そらもう何ですけれど、私は斯う云ふ體ですから、奈何にも濟みませんわ（と濕んだ眼を落しながら）目下どんなにしてゐらつしやいまして」

「さうですな、多分宗教に慰藉を求めてゐるのでせう。千駄ヶ谷教會の牧師を一寸知つてゐると云つてましたッけ。今朝からも行つてたンですよ。」

「あの、千駄ヶ谷教會へ？」豐子の顏は卒に燃えた。

「貴方も行きましたか。」と間に合はせに附かぬ事を聞く。

「いえ、ですが私、知つた方があり云すのよ。」

「何う云ふ方ですか。」

「山邊さんッて、お友達が……。」

「其れは丈の高い婦人でせう。」

「え、よくまア貴方。……。」

「日外宮井君と丸の内を歩いてゐた。」

「あら、……。」と豐子は思はず身を震はした。

四の四

翌日宮井の許へ多羅尾から迎ひ俥が來た。彼は其の事情を推測つて、過敏な神經を苛立たしたが、餘りに業々しいので、二の足を踏んだ。持たして寄越した手紙には、何處に奈何とも書いてない。

「一體何處に居るンかね。」

「へゝへえ、旦那、つい其處でげす。何うぞお召しなすつて下さい。」と云つて、車夫は彼を促してゐる。

それで宮井は一寸羽織を引懸けて、古ぼけた帽子を冠つて、俥に乘つた。毎ものやうに不安動搖の念に驅られて行くと、俥は威勢よくガラ〳〵と即席御料理の式臺に止つた。處は溜池の曖昧屋の眞中である。

「いらつしやい。」と婀娜ぽい聲が應じた。

宮井は汚らはしいッと舌打ちしたが、其の時は既に遲かつた。眞白に塗つ

た婢が素早く彼の帽子を取上げて、手を引かんばかりに、奥まつた座敷へ案内した。

「よく來てくれたね。」と多羅尾は喜んで迎へる。

「をかしな處ぢやないか。」

「何有、大丈夫だよ。久振りで一杯日本料理の粹を味はうと思つてさ。君は夕飯未だゝらう。」

「あ。」

「そんならまア緩くりしたまへ。敢て心配するにや當らんよ。」彼は胡坐をかいて、傍の婢に何か二人前程持つて來いと命じた。

宮井は辭みかねて漸々腰を卸した。六疊の茶がかつた座敷で、四尺半の床には贋物の掛軸、絹代の天井からは、瓦斯がぶら下つてゐる。玩具のやう

な箱庭の柳の枝が、硝子越しに見えてある。多羅尾は待つてゐる間に、一石やらうと云つて、碁盤を取寄せた。曾て船室で黒白を爭ふた事もあるので、宮井は四目置いて、チョン〳〵打ち出した。

其の勝負の了らぬ内に、婢が嫁菜に白魚の味噌汁、蒲鉾を賽の目に切つた取肴、鯛の鹽燒などを運んで來た。而して一本は氣が利してある。

「まア、後にしやうせ、君の方が優勢だ。」と多羅尾は猪口を取らうとする。

「あ、僕は飲まないよ。」と云ひつゝ彼は盤面を眺めてゐる。極く下手な筈碁だが、今日宮井は案外此の遊戯に興味を覺えた。

多羅尾はチビ〳〵飲る。

「貴方もお一つ召上りましな。」

「此の人は可かんのだ。」

「さう、でも隨分お堅いのですわねえ。おほゝほゝゝゝ。」と下つた眼尻で、蔑んだやうに宮井を見た。

「其れは石橋の田樂だからね、御飯の堅い處を裝つてやつとくれ。」

「まア、貴方てば……。」婢はどッと笑つた。

宮井はいよ〳〵苦り切つて、

「多羅尾君、其の婢を彼方へ遣りたまへ。でなきや僕は歸る。」

「はッはゝゝゝゝ、厭に振るね。」

「ハイ〳〵、參りますとも。」と婢は立上つた。

「ちやもう一本とね、お茶を持つてお出で。暫時島流しだから。」

「ハーイ。」と婢は行つて了つた。

宮井が機嫌を損ねて、餘り食事をしないから、多羅尾もさうは飲らずに、

巻莨を吹かしながら碁にかゝつた。今苑斯を點けに來たので、四邊はぱッと蒼白く明るい。最初の一面は多羅尾の中押負けになつた。さて此度は二番目だ。彼がこんな事をしてゐるには、頗る胸算用がある。昨夜大澤から頼まれた一件を宮井に告げて、十二分の好結果を得ずばならぬ。若し彼が一杯飲るやうなら、藝者でも呼んで、此方のものにして置いて、然して徐に矢を放つ積りであつたが、其れは丸で受附けさうもないから、彼は殿様碁を打ちつゝ鉾先を向ける。

「君、大澤さんに些とも誤解されちやゐないよ。僕が確に保證する。」

「うーむ、さうかい、何うでも可いやね。……此處切るせ。」

「馬鹿に攻撃的だな。……だから君も感情を棄てゝ、お互の幸福を計らにや可かん。」と碁の方はそつちのけである。

「一體幸福ッて何だらう？」

「そら、君のやうぢやないのが幸福さ。餘り君も一國すぎるせ。以前あんなに親しくして置きながら、此地へ歸つて、一度訪ねもせにや、葉書一枚やらぬのだらう、……。」

「いや僕は横濱から直ぐ葉書を出した。」

「そんなら可い。」

「訪ねても態々伊豆まで行つた。」

「それはさうだつた。」と多羅尾は稍陷んで、

「だが君は些とも口を利かないだらう。其れが可くないよ。」

「そりや必要がないもの。」

「ない事があるもんか、さう君のやうに警戒ばかりしちや仕方がない。今

更何と云つたつて徒爾だが、去年の彼の時通信して置いたら、君は非常な幸運兒であつたんだ。僕は其の大なる理由を發見して來たよ。……いや、是れからでも未だ結構だ。決して葬り去られちや居らぬ。君が眞面目に聽くのなら、僕は其の理由を話すが、何うかね。」多羅尾は碁盤を放れて、相手の動止を瞳つた。

四の五

自體多羅尾は物質慾の發達した人物で、凡てを利害から打算する傾向がある。と云つて萬更友情のない守錢奴ではないが、以前豐子に同情して置いたり、今度錦之助を取込んで來たのにでも、移民の保險を附する時幾乎の便宜はあらう位の感想は、少なくとも宿つてゐる。そして一方の宮井には、

己が事業のために多大の望みを囑してゐるのだから、何うか豐子と結婚させて、再び彼を南米に赴かさうと思ふ。

最初多羅尾が秘露へ往つたのは、既に十二三年前のことで、彼の奉公してゐた近江屋の主人が、花筵の輸出を思ひ立つて、彼を其の視察に遣つた。江州の片田舎に生れた百姓の子だが、商業上の手腕は中々ある。事業は着々歩を進めて、支那人の手を經ないで貿易されるまで運んだ。けれど何分需要に應じる丈けの供給が乏しいので、其の事業は一先中止になつた。それで多羅尾は移民會社の社員になつて、爾來傍ら商業を營んでゐる。彼方へ渡る度毎に、多額の絹手巾と花筵を持つて行つて、三割以上の利を占める。在京中には屢々蛎殼町へ出入りして、損をするより儲ける方が多い。常に色の褪せた背廣を着てゐる獨身の下宿住ひが、二三萬圓の金持ち

である。近き將來に之れを十數倍にして、盛に南米貿易を始める計畫たさうだ。昨夜も錦之助と通商貿易に就いて荐りに語つてゐた。友人等が妻帶を勸めると、女房は四十になつてからで可い。金銀さへあつたら、六十の老爺にでも十七八の花嫁が來るなどと、笑はせるのが例である。

宮井は彼の性格を略知つて居る。で、其の一面には太く敬服してゐるが、今一息全幅の信用を措きかねる。頗る輕卒な擧動をしてゐながら、意外に常識の發達した男だから、些とも油斷は出來ない。例へば此の會合にしろ、豐子の方に問題が起つたから、斯う逼つてゐるのだ。どんな野心を潛めて居るかも知れないと、宮井は何がな反抗の氣味になる。

「一體奈何したら可いんだね。」と談話が一頻濟んだ時、彼はこんなに呟いた。

「奈何つて、君がもう拗くれを止めて、大澤樣の厚意を受けるのさ。是非逢ひたいと云つてるのだらう。大に遊びに行つて、舊情を暖めさへすりや、失戀の苦痛は夢の如く消えて了ふよ。さう快々してゐたッて、何の役に立つもんか。些とは君、常識的に考へないちや可かんせ、決して他人事ぢやないから。」

「そりや解つてる。だが僕は多少困ることがあるのだ。」

「何を困るのかい、要するに君は豐子さんを失つたから、煩悶してるんだらう。」

「うん。」

「そんなら、一つ淡泊に彼の人と結婚したら、何うかね、君は勝手に失戀してるのだ。」

「えッ。」宮井は動悸した。両手で頭を抱へて凝然考へこむ。

「彼方ちや大事の養子を離縁までして、君に義理を立てゝるのだよ。況し て人は眞心を殺すものぢやない。持參金の五千や一萬は寄越さうと思ふが、さうすりや、過去の失敗も償へるぢやないか。」

「多羅尾君。」と聲を變へて、

「僕をそんな卑劣極る男と思つてるのか。持參金だッて、汚らはしい止してくれ。」

「まア、さう拗たもんぢやないさ。悉皆好意づくから出た話しだ。」と努めて物靜に云ふ。其れと反對に宮井はもう激して了つて、

「今更そんなにしたッて、何の効があるもんか。養子を離縁さす位なら、僕は伊豆であんな別れを告げぬのだ。豐子は一旦人の妻になつたのだから、

終生添ひ遂げるが可い。其れが犯すべからざる人道だ。僕は彼女を愛するの餘り其の人道を全うさしたいと思つて、斯う身を引いてゐるぢやないか。」と勢ひ猛烈である。

多羅尾は内心餘程立腹したが、喧嘩しては損だと制しながら、

「そりや成程さうかも知れんね、君は高潔な精神を有つてるから、併しまア克く考へて見たまへ、今日豐子様の獨身になつた動機は、只君の眞心に報いたのみだよ。だけども兩親初め僕等が其の間に介して、能ふべくんば平和の實を結ばせたいと望むのさ。其の希望は君の所謂人道に背くかね、一圖に我意さへ通したら、他は其れがためどんな損傷を蒙らうと苦しまうと、悶死に死なうと管はぬと云ふのぢやあるまいなア。若しそんなだつたら、それこそ人道を無視した話しだ。それぢや君、些と恩知らずに聞えるよ。」

と底冷く皮肉つた。

彼はもう最初の元氣を失つて、苦しさうな溜息を吐いた。殊に恩知らずの一言には慄然して、

「まア、待つてくれ。」と叫んだ。

「そら待つとも、緩くり考へるが可い。」と云ひつゝ座敷を出かける。

「何處へ行くンかね。」

「何有、一寸。」

「もう歸へらうぢやないか。而して宅へ來てくれたまへな。」

「あ。」

「僕はこんな處大嫌ひだから、考へも何も出來やしない。」と宮井も立ち上つた。

で、彼等は間もなく料理屋を出たが、多羅尾は流石に不機嫌の體で、兎もあれ熟考の上確答を賴むと、言葉を殘してそれきり別れて了つた。なまめかしい三味線の音が其處此處に聞えて、肉慾の臭ひはぷん〳〵してある。宮井は空の星を眺めつゝ宿に歸つたのであつた。

五の一

人間の情緒は實に不可思議なものである。宮井は永の歳月寢ても醒めても、慕ひ憬れてゐた豐子との緣談を餘り喜ばなかつた。彼女が自分の愛に報いて、獨身になつたのは寧ろ當然だと考へる。其れと同時に多日鬱結してあつた胸が晴れ初めて、失戀の苦痛は過半消失せたかのやうに感じた。而して彼は其の消失せるのを悲しんだ。宛然父や母に別れた時に劣らぬ淋しさ

が湧いて來て、心が空虛になつて了ふ。何故こんな精神狀態になるのだらう。色んな意地や抗氣や理想は拋つて、矢張婚姻した方が可からうかとも思つたが、結局其處迄の希望は燃えぬ。で、彼は多羅尾に宛てゝ、恩人の君の好意に背くは辛いけれど、どうか豐子に關する件ばかりは、自分の主義に從はしてくれまいか。其の代り必然彼女を幸福な人にするから、暫時高處の見物してゐて貰ひたいといふ斷り狀を送つた。

其の手紙を出した夜、彼は豐子の夢を見た。二人が連立つて、譯の解らぬことを話してゐると、だら〳〵汗が流れて來る。まあ此の手の熱さは何うかと云つたら、えゝと彼女は羞んだやうであつたが、山王の森に明烏が鳴いてゐた。彼は夢でなかつたらばと思つた。豐子がずつと近寄つたやうな心地がして、過去の追想が交々湧いて盡きなかつた。そして次の晩は、彼

女が宮非の無情を恨んで、悶へ苦しんでゐる幻を見た。是れは多羅尾が彼の手紙を見て怒つて、彼女に告げに行つたからだと、宮井は想像を廻らした。威程酷な話しだ、多羅尾の立腹は無理もない。何しろ自分が今日生きてゐるのは、彼のお蔭であるのみならず、自分の前途に囑望して、あゝ云ふ斡旋の勞を執つてくれたのだもの。其れを無下に斷つたら、そら誰だつて怒るのが至當だ。豐子にしたところが、何も彼女がすき好んで結婚したのぢやない。自分の音信は沒收されるし、家を嗣がねばならぬ羽目になつたから、到頭眞心を殺したので、格別非難すべき點はない。自分の安否が知れると直ぐ離婚の要求をして、人の愛に報いたといふに至つては、實に見上げた可愛らしい心根だ。斯うあつてこそ人生に意義があるのでないかと、彼は華やかに考へ出して、家庭の密に醉はむ氣になつたが、さうすると、

花子に合はす顔が無くなると呟いた。

宮井は其の夜も亦豐子の夢を見た。彼女が何處かの崖から苔みだつた淵へ身を投げた怖しい妄想で、翌朝になつても、其の修羅を燃やした不詳な印象は胸より去らなかつた。で、彼は多羅尾の許へ行つて、以前の申込を取消ねばならぬと思つた。眠不足のぼッとした眼を擦りながら日比谷公園まで來た。鍛冶橋五郎兵衞町の彼の社へ向ふ積りである。

空は壓潰されさうに曇つてある。朝の公園は左程雜踏してないが、躑躅の園や藤棚の下には多少人がゐた。彼は歩行振りの好い女に出合ふと、若しや豐子ではあるまいかと、動悸するのであつて、今日も其の感が一寸した。紅、赤、朱、白などの躑躅の色彩に索かされて、彼は其處等をぶらつく。餘り奇麗なものだから、赤の一枝をそッと椀取つて、鼻の先へ突附けたが、

何の匂ひもない。こんな香のない花なら、繪具で染めたつて出來らアと、手早く躑躅を捨てた。さうかうする內に、彼は非常な廣い世界へ出たやうな心地になつて、只あるベンチに腰掛けた。そして頭腦をそれからそれへと走らして、多羅尾の處へ行く氣は失つた。

二兎を遂ふ者は一兎も得ずとは、微の生えた諺だが、二兎を得るよりも、一兎を完全に得やうとする方が一層困難であらう。人間が完全を求めるのは、理想に魅せられたからだ。此の病ひにはえて正直な者が罹る。何か烈しい波瀾に揉れると、人は兎角眞面目にか、自安になる。自分は父の馬鹿正直の犧牲になつてゐながら、依然眞面目に趣いた。正直の首に神宿るなどと繰返して、襲ひ來る恐怖心から逭れやうとした。斯うさへしてゐたら、何時か黄金の茶釜が轉け込むだらうと夢んでゐた。其の空想が豐子の手で

端なく實現されたので、彼女と交際してゐる間でも、飽迄で理想的にやつた。むつちりした肉に觸れて、彼女の體溫を感じると、もや〳〵息が喘んだが、そんなことをしては、將來の幸福を奪はれる。理想の家庭が汚れると思つて、毎も制して了つた。曾て一言の嘘言も得吐かなんだ。些細な方便も使ふに忍びなかつた。で、自分は徒勞の器械になつた。理想を追ふた結果は零だ。……宮井は樣々考へる。

後には晴れるであらう。薄墨のやうな雲の隙間から日光が洩れて、彼の横顔へ當つてゐる。青桐の梢は風に搖らぐ。其下のベンチに子守が二人ほどゐた。向ふの廣場で何處かの學生がベースボールを始めてゐたが、球が一つ逸れて、彼の足元へ辷り込んだ。白シャツ一枚の書生が飛んで來て、「失敬。」と宮井の足を掻除けて置いて、球を拾つて、走つて行つた。

それで彼は折角の冥想を醒まされて、怫然したが、學生の若い姿に、中學時代の記憶を不圖喚起された。あの時分とは、非常に變つたもんだ。ずつと順調に來てゐたら、今頃はどんなになつてゐるだらう？非常な波瀾ばかりで、實に滿らないと、宮井は自分の影を消えるやうに思つて、其處等を當所なく首垂れつゝ歩くのであつた。

五の二

宮井は午飯頃に宿へ歸つた。食事を濟まして、彼は机に凭れた。此の間讀みかけて置いたフォガッツアロの「聖徒」を披いて見る。讀書は目下彼の云はゞ日課である。宗教、科學、哲學、文學、何でも構はない。自分の本體を掘出してくれさうな活字を漁つてゐる。けれど英雄豪傑の傳記類はさう

喜ばなくなつた。殊に彼はリビングストンの傳を讀んで、其人物の餘りの偉大さに非常な苦痛を感じた。而して傳記中には、色んな僥倖兒を連ねて、其れが偏に彼等の刻苦勉勵の致した處だと定めてあるが、其處が彼の喜べぬ點だ。成程某某はさうであつたらう、併し彼等より遙に激烈な奮鬪を續けて、遂に空しく埋もれた人間が幾らあるかも知れぬ。畢竟立志傳中の人物は、何億萬人の內の二三人で、何千何百年間の四五人だ。だから一向當てにならないと考へる。尤も彼がさう考へる時には、自分の年齡をつい忘れてゐる。最早人生の凡ゆる苦鬪を爲盡して、全然徒勞に歸したと斷定する。そして遂行されないのに、理想を捨てなければと焦るのである。

宮井は「聖徒」の「顏と顏」の章まで讀んで來た。隨分六ケ敷い小說なので、實は感興が薄いのだが、辛々胸に應へる味な文字に出會した。ベヲデトは

ジャンヌと下のやうな對話をしてゐる。彼は以前の俗名、ヒエロマイロニーの時代に、ジャンヌと戀中になつた。今一歩で特殊の關係に立入らんとする矢先、彼は妻の病死の急報に接して、局面を一變せしめた。其の後彼は侯爵の地位を顧みず、一切の財產をも棄てゝ了つて、修道院に這入つた。神召し給ふと云つて、終夜祈る事屢々である。ジャンヌが三年振りに慕ふて來た戀人は、最早ヒエロマイロニーではなくベヲデトであつた。

彼の聲は殆んど聞き取れぬ位に呟いた。

『未だ信仰はないか。』と彼自身に云つたかの如く靜に。彼女は答へた。彼女の首を向けないで、

『然り。』

彼は少時沈默して。やがて續けた、同じ調子に、

『御身は其れを欲せぬか、御身は御身が神を信じたかの如く御身の行爲を正しくし能ふか。』

『然り、若し妾が嘘吐く可く餘儀なくされんならば。』

『御身は貧しき人、惱める人の爲に生く可く約束するであらうか。恰も其等の各自が御身の愛する處の人の一部分であるかの如くに。』

ジャンヌは答へなかつた。彼女は成し能ふ事を告白するべく餘りに遠くを見て、餘りに正直であつた。

『御身は此れを約束するであらうか、……』ベチデドは續けた。……若し余が或る未來に於て御身を余の傍に招く可く約束するならば。』

彼女は彼が斯う云つたの程莊嚴なものを知らなかつた、而して彼が考へて居た未來の遙けさをも。

彼女は答へた、顫へつゝ。

『然り、然り！』

こんな調子に宮井は逐字譯して讀んだが、頭腦が疲れて來たので、書物を伏せた。若し自分がベチデドであつて、豐子がジャンスだつたら、どうだらうかと云ふ想像を浮べた。それから自分は何で信仰が進まぬのであらう？ベネデドのやうなことは迚も出來ないと思ふ。何か叙事的な文章を讀むと、直ぐ自分に比較して見るのが、彼の近頃の癖だ。將來眞面目な情緒が外界の壓迫に彌々堅く縮められたので、彼は醉ふたり、怡んだり、自己を忘れる餘裕がない。けれど其れは彼に不自然な形だから、往々支離滅裂な思想を抱かせ、矛盾した行爲を强ひる場合がある。

一體宮井の信仰は、受洗當時から動搖してゐる。秘露の集治監の中では、

聖書が神の默示と讀まれて、基督は救主であると縋れたが、歸朝後婆婆の風に當るにつれて、彼の自我は次第に頭を擡げて來た。其れを抑へ、行々全然滅して了はねば、宗教的安心立命は得られぬので、彼は其の邊の要求から教會員にして貰つた。が、教會内の空氣は彼の豫期に反して、自我の強さうな人物の集合地らしい。これは別に生れ更つたと云ふのではないと何時しか感じた。其の感じが導火線になつて、彼の自我に舊の位置を占めるやうになつた。で、宮井は基督を人と見るか、神と見るかの岐路に逢着した。多少は牧師に質し、花子にも聞いたが、彼等は丸で神に定めてゐる。けれども彼は歴史上の聖人と見る方が確實だと考へる。すると基督は儀表とするには、餘りに高過ぎて、懸隔の甚しさに慙愧の念が起る。例に依つて、そんな眞似は出來ぬと斥けたくなる。能ふべくんば、絶世の大聖人と

相對待して、正々堂々人生を濶歩したいのだが、悲しいかな、彼の自我は重々の痛手を受けて、周圍の壓迫に耐へられぬ狀態にゐる。であるから、彼は無能な自我を捨てゝ、基督の膝下に平伏して、救主なる神よと崇めたいと思ふ。併しながら然う信ずることは、彼に取つて非常な困難である。餘りに困難だから、宮井は教會の人達の信仰狀態を不審議がつてゐる。自分も隨分輕卒に受洗したが。他の人のは一層早さうだ。月々三人五人と、苦もなく信者になつて行く。或る人は夫に別れた、或る人は入學試驗に落第した、或は事業に失敗をした、或は緣談が外れたと云ふやうな場合に、知邊のクリスチャンが教會へ引張つて來る。隙に任かせて訪問するので、ヤソは親切だなアと思つて、翌日から早速クリスチャンになる。牧師は神の存在、基督の神性、其の贖罪の力などを千古不易の眞理と斷定して、祈

れ罪人と叫ぶ。眞面目に聽いてゐたら、不可解な節々は多いのだが、初中終繰返されるので、終ひにはもう異樣に響かなくなる。其處で所謂囚はれて了ふのだと批評的に考へて見る。けれども彼は宗敎上の慰藉を拒み能はないし、其れが如何に困難でも、人格的の神を認めて、新しい意識に改心しないでは、靈性の滿足は得られぬと云ふ思想に、毎も附纒はれてゐる。現に宮井はベネデトのやうな堅信を與へたまへと祈つてゐた。すると宿の女中が上つて來て、

「宮井さん、お客樣ですよ。」と云つた。

敎會の小杉長老が關長老と倶に見えたのだ。曾て來た例のない人なので、彼は訝りつゝ彼等を請じたのである。

五の三

小杉は今日私服でゐる。捻り切つて了つた疎らな髭を苦にしながら、薄い唇に白ッぽい前齒を洩らして喋べる。宮井は彼の顏を最初花子の宅へ行つた晩から覺えてゐる。關は毎日曜日の禮拜に、獻金の籠を持つて廻はる長老である。或る銀行の支配人とか、隨分大柄な體格の紳士で、會ふ程の人に可い印象を與へてゐる。文學の趣好が意外に深いと云ふ呼だ。

「何かお讀みですか。」

「一寸「聖徒」を讀んでゐたのですが、十分に意味が解りませぬ。」

「いえ、そんな事はないでせう。實に立派な小說ですね。」と關は眼鏡を外して、手巾で拭く。

「お讀みでございましたか。」

「ずッと以前拜見致しました。さう云ふ小説が日本にも出來ますと可うございますがね。」

「若槻さんが書くンぢやないですか。」と茶を侑めつゝ宮井は云ふ。

「彼の男に宗教小説は怪しいね、丸でもう信仰が變つてるもの。」と小杉が透さず言葉を入れた。

「さう斷定も出來ますまいよ。彼の人のは、口の方が實際より數等惡いのだから。」と關は辯護の口調である。

「ですが、期待は尙更出來ませんな。若槻君は神學校を止す時分に、もう眞面目な信仰を失つてゐたのでせう。教會へ出てはゐるが、いやはや厄介な男でさア、和田先生も弱つてましたッけ。」と無造作に惡評をする。

小杉は日外泣きたいやうな感話をしてゐたが、案外口の仂ない人だと宮井は思つた。さうかうする内に、多羅尾が訪ねて來て、

「宮井君々々々。」と段梯子の處から呼ぶ。彼は厭な顏して其れに應じた。

「お客があるンだね。」

「けれどもまア上りたまへ。」

「うん、教會の人だらう。」

「あ、だから可いやね。」

「いや、……筆記帳を貸さんか。今日は馬鹿に用事が多いぜ。」とにやにや笑つて、卷莨を吹してゐる。

宮井は仕方なしにノートブックを彼に手渡した。

「お玉さんは何處かへ行つてるね。」と云ひつゝ多羅尾は降りて行く。

彼は座に復つて、缺禮を謝したが、二人は大變お邪魔であつた、實は會堂建築のために任意の献金を願ひに來たので、何れ後日お目に懸らうと、言葉を殘して立上つた。宮井は濟まぬやうな心地に滿されて、彼等を送り出したのである。

後で多羅尾は筆記帳を手にして、二階へやつて來て、

「何しに來たんだね、彼の人達は。」と胡散臭く問ふ。

「今度教會堂が改築されるンでね……。」

「奉加帳を持ち廻つてるのかい。矢張先立つものは金銀だよ。」と機敏な推測をする。

宮井は浮虛喋つたと凹んで、口を噤んだ。斯う窮屈になさねばならぬ原因に想ひ至ると、沁々情無うなつて、手足の筋肉に痙攣を覺える。不如怒つ

てゐるのなら未だしもだが、宛然瓢簞に鯰のやうな調子だから、何う取留めて可いか判らない。只もう自失して了つて、多羅尾の顏を無意味に眺めてゐた。

「どうか君、確り頼むぜ。一昨日の手紙にや全く驚かされたなア。何處押しや如彼云ふ音が出るンだらう。まさか正氣の沙汰ちやあるまいね、えゝ。」

彼は串談の裡に揉消さうとした。

けれど宮井が虛言は吐かぬと掉頭を振るので、多羅尾も餘儀なくむきになつて、そんなら、此の三ケ條に確答したまへと、筆記帳を彼の前に突出した。ノートブックの端には、こんなに走書がしてある。

(一) 君は飽まで基督教を奉ずる所存なりや。

(二) 基督教の教理は絶對的眞理なりや。

（三）基督教徒は果して善人なりや。

彼は我れを勵まして、何氣なく讀んで來たが、第三問には慄然した。

「ねえ、分つてるだらう、誤解を招かぬために書いたのさ。さうして置くと、時間も省けるし。」と多羅尾も傍から覗き込む。

「克く分つた。姑く待つてくれたまへ。」と宮井は壁に凭れて、腕を拱いた。眞蒼な顏色になつて、厚い唇を震はしてゐる。

基督教徒は果して善人なりやとは、てつきり自分を颯したものだと彼は直覺した。多羅尾は教理を云々するやうな男ぢやない。要之自分に基督教を止めさして、豐子と家庭を造らせやうとの好意なのであらう。其れは實に難有いが、今となつては、自分の意志が滿足せん。だから恩知らずになる。惡人の誹を受ける。——嗚呼、何てふ不幸なんだらう？　豐子と結婚を

しないから、斯う苦しまにやならぬ。此れがためには半生涯を犧牲に供して來たのぢやないか。——茲三年や四年には樂しかつた日は一日もない。奮鬪、徒勞、逆境、失望、一體奈何なるのか知ら。人生は徹頭徹尾不可解だ。少くとも自分のやうな者は、此のまゝ死んだ方が可いとまで彼は滅入つて了つた。熱い涙が頰に傳つてゐる。

此方の窓際から彼の動止を目戍つてゐた多羅尾は聲をかけた。

「餘り一時に考へ込んぢや可かんよ。」

「あ。」と冷やりして、

「散歩しないか、君。」と座を立つた。

「何處へかね。」

「山王の山へでも、……途々話さう。」宮井はノートブックを引裂いて、難

題な質問書を懷中へ入れた。

五の四

「要するに君、第三問が主眼だらう。」

「まア、そんなもんだ。」

「だから僕は三問から答へるよ。」

「さうしたまへ、すると他は自然解決するかも知れん。」

「うん〳〵。」と宮井は頷いた。

是れだけ話したきりで、二人は山王の境内をぐるりと廻つた。三抱ひ以上もありさうな杉の老樹に、葉櫻や若楓が交つて、照りも降りもせぬ曇つた太虛の下には、今一重暈が冠つてゐるやうだ。案外落付き拂つた靜かなもの

で、そよ風一つなければ、人も餘り通つて居らぬ。何となく山奥の古寺見たやうな心地がして、石段の邊りに雛僧が竹箒を持つてゐさうである。掛茶屋の婢は執拗く客を呼んでゐる。其の仇つぽい聲が木精に響いて、其處へ向ふで通る電車の音がガウと手助つて、可惜靈山を俗化して了ふ。

宮井はあゝ云つて、かう答へやう、自分は敢て不善を成しちやゐない。人生にはより高い生活があるから、さう一概に苛めないで、少しは此の衷情を察してくれ。如何に苦しいかは、定めし思ひ半ばに過ぎやう。彼女との關係を知らぬ君ではあるまいがと、色々思想を組立てるが、一向口には上さない。宛然蛇にでも追はれたかのやうな心持で家を出たのだから、斯う明るい處を歩いてゐたら、何時か魔性は退却するだらうと云ふ感じがしてゐる。此の前豐子の姿を見たと思つた場所へ來て、彼は一寸立止つた。實

際彼女だつたのか、確と其れは分らぬけれど、懐しい彼女の面影を胸に浮べた。すると今迄考へてゐた事が馬鹿々々しくなつた。強ひて好んで縁の下へ這入つて、足を抉る必要はないと呟いた。以前走つたのと同じ狭い阪を迂回して、夢ではないかと疑ひつゝ降りた。

電車道へ出ると、それでも幾乎風がある。電車の交通が激しいので、宮井は現實の世界に乗込んだ。多羅尾の默つて跟いて來るのは、妙に氣が引けたが、滿更不快とも思はなかつた。赤坂見附にはリボンの翩々した女學生や、色んな人間が乗換切符を持つて、どつさり立つてゐた。宮井は次第に意を強められて、足の運びを早めた。古びた辨慶橋へ差掛ると、黒ずんだ土手の松が綺麗な壕に映つてある。片方は大名か宮家の屋敷であらう、自然のまゝのやうな新緑の樹々に、複雜な色彩を呈してゐる。枯枝の大木が

幽しい調和を保つて、其れも亦水の中に蒼々見える。彼は清水谷の松林へ入つて、只あるベンチに近寄つた。板が朽ち果てゝ、雨風に曝されて、腰掛けやうものなら、尻が漏れさうになつてある。けれど彼は其處へ腰を卸した。

「此のベンチだつたよ、僕が最初彼女と語つた處は。」と平ッたい顔を赧めて、餘程決心したらしく云ふ。

「ぢやア、多少今昔の感は殘つてるかね。全く死に切つても居らぬか、はッは、、、、、。」

と多羅尾は笑つた。彼は先刻から宮井の趣くに任して、相手の内心を探つてゐたが、稍意を得たので、傍へ危げに腰掛けたのである。

「無論さ、だから彼の話しは暫時猶豫してくれたまへな。今朝さう思つて

何だつたけれど……。」

「猶豫なんッて、全然撤回すべしだ。」

「まア兎に角考へて見る。そしたら、善人なりやなんぞと苛めなくつても可いだらう。」

「善人云々？　ありや君を指したんぢやない。」

「ふん。」

「勿論君も其の仲間入はしかけてるがね。」と鋭い瞳を瞬いた。

宮井は譯の解らぬ不安の念に驅られて、殆んど茫然した。何か云ひたいが、鳩落がひり〳〵して、些とも口は利けない。で、彼は窮したら、歩くが可いの手近い經驗から腰を伸ばした。今迄氣が附かなかつたけれど、向ふの岡には紅白の躑躅が咲き亂れて、ぞろ〳〵人が通つてゐた。池の岸に立つて、鯉に麩を投げてゐる子供がある。つい近くへ來て休んでゐた女もあつた。宮井はのこ〳〵松林を出た。多羅尾は肩を並べて、洋杖を振つて行く。

「何うか卒直に云つて欲しいね。」

「何有、未だ善人の事かい。」

「あ、僕の外に君が皮肉くる人はあるまいと思ふから。」と宮井は怖ろしい不審を早く晴らさうとする。

「それだから君は可けないのだ。融通の利かぬ自分を標準にして、裏面を些とも窺はないで、何もかも信じて了ふ。そんな事で人間社會に立てるかね。僕が張本人は外にあると云つてるぢやないか。君は善人過ぎで不善の仲間入りしてるのさ。少しは批評的に見たまへな、其れが出來ぬ君ぢやな

いから。もう可加減に眼を醒さないと仕方がないよ。散々手を焼いて來て、やつと此方のものになつたと思つたら、また耶蘇に迷信しちやつて、出傍題に欺かれてゐる。僕は先刻つい出來心から如彼云ふ質問を出したのだつけが、要するに此の點に君の反省を促したいのだ。何と云ふたつて世の中にや、自分の利害得失を忘れて、二つとない生命まで棒に振つて、信せにやならん宗教もあるまいし、女を愛する必要もないさ。君はそんなに宗教が難有いかね。」何かと訓誨するやうな調子で饒舌る。

「僕のは決して迷信ぢやない。」

「ぢや眞理と確めたんか。」

「うんにや今研究中なんだ。だがまア可いぢやないか、そんな事は。」と早口に云つて宮井は吻とした。

五の五

多羅屋は宮井を只ある蕎麥屋の二階へ誘ふて。天麩羅を誂へて、ビールをチビリ〳〵飲む。宮井は强ひられてもやらぬので、時間の加減をして蕎麥を喰つてゐた。すると彼は日に燒けた顏を一入を赤めて、格にもないこんな事を云ひ出した、抑々テンプラなる言葉は、西班牙語の「Templo(寺)の料理」から來てあると。宮井は些と滑稽に思つて、里馬の支那料理店の看板に轉不稜と書いてあつたが何うかと笑つた。其れをきつかけにして、彼は話頭を秘露に飛ばせた。是れだから多羅尾には油斷が出來ぬ、有觸れた辭書にでも見えるやうな詰らぬ文句を引張り出して擔ぐと、宮井は頭を搔いたが、散々油を取られて、舊生涯の衣を着せられた。

夕刊は一錢と、新聞賣子がチリン〳〵通る。それッと、彼は急遽に降りて行つた。其の間に宮井は窃とビールを注いで、コップに半杯盗むやうに飲んだ。酒精成分は絶えて久しいお見舞ひである。彼は怖さうに何遍も口元を拭いた。其處へ多羅尾は新聞の相場表を讀みつゝ莞爾上つて來た。大抵の客は階下で所用を辨じてゐる。で、宮井は透さず、

「相變らずやつてるのかね。」と聞いた。

「あ、世の中に錢儲程愉快なものはないよ。――後場の此の値は當然だ。」と後の句を獨語つ。

「もうそんな危險を冒さなくッても可いぢやないか。失敗せぬ内に止したまへよ、君。」と沁々云ふ。

「さう思つてるから可かん。」と天麩羅蕎麥も好きなビールも其方除にして、多羅尾は言葉を續ける。

「僕が秘訣を授けてやるから、君も少しやつて見ないか。金銀を儲けるには、此れが一等安全な捷路だよ。一昨日先物を百枚計り買つて置いたッけが、近い話しが今日の大引は十〇圓〇十錢だらう、僕の買つたのは、〇十〇錢だつた。斯う云ふ時に所謂投機するのさ。決して中直相場にや手を出すンぢやない。年々上下してある米價の範圍から割出して、此の先は上より下が多いと見たら賣る。其の反對の場合には買ふのさ。大概の奴は商業の精神を放れて、賭博的な射利をのべつ幕なしにやつて、儲かれば費ふ、損すりや、又自暴で費ふから、君等に危險だと云はれるのだらう。けれども僕は普通價格の標準に重さを置いて、年に三度以上は仲買店の閾を跨がぬよ。だから毎も確實な利益を得てるが、何うかね、君も此れに依つて、

基礎を作りたまへな。」と得意に溢れて、荐りに彼を動かさうとする。

けれど宮井は餘り魅されない。胸の深疵は到底金錢や事業で癒えそむないのみならず、多羅尾の腹があり〳〵透通くので、氣の抜けたビールのやうに厭になる。これは自分が信仰狀態を明したから、斯う誘惑されるのだ。矢張思想を堅固に有つてゐないでは惡いと思つた。而して彼の信者攻擊の的は、山邊であるまいか、其の他に彼の知つてる人はない筈だと推定して、苛々坐に堪へかねてゐた。

彼等は蕎麥屋を出た。最早夕暮間近である。此度は多羅尾が呑込み顏に先導して行く。

「君が非難してゐるクリスチャンは、山邊さんのことだらう。」と氣味惡げに云つた。

「さうさ、すきが廻つてるから、深く伏罪したまへ。そしたら、穩便の沙汰にしてやるよ。此の間の晩も、實はお慈悲で默つてゐたンだ。」

「何有。」と宮井は嚇となつて、

「失敬だぞ、多羅尾君。他人を無暗に誹謗して濟むか。」と頓狂に手を振る。

「はゝはゝゝ、無暗だと云ふぜ。此の人は(と冷やかに笑ひながら)おや矢張訊問しなくちやならんけかね。」

「訊問も糸爪もないもンだ。」とやきもきして、

「君は慥に誤解してる。彼の人は決して僕の不利を計つてる人ぢやない。豐子と親密な間柄だから、斡旋の勞を取つて、僕が精神的交際をするやうに盡力してるのだ。それだのに、……。」

「おイ〳〵。」と相手の言葉を遮つて、

「其の精神的交際とは誰とだい。」

「無論豐子とだ。そして僕は彼女を幸福に……。」

「さう〳〵、取憑かれた男の云ふことは、又格別なもんだ。」

「まア、聽け。」

「そら、聽きもせうが、餘り笑止で、皆まで云はすに忍びんよ。一體君は何時始めて山邊に會つたンか、三月の上旬だらう。」

「あゝ。」

「すると中旬は其の後だらう。上旬に會つた男を中旬に忘れてる筈はないね。」

「うん。」

「すると知つてる癖に、白ッぱくれちや虚僞になるね。」

「訊くにや及ばん。……併し僕は失敬する。」と吃驚した氣配で、彼は踵を返した。

「まア可い、折角此處まで來たもんだ。逢つて來さへすりや、厭な文句はなくなる。」とぶる〳〵顫ふ宮井の肩先を捉まへる。

「可かん〳〵。君はべてんに懸けて、僕を釣込んだ。」

「何か云つてらア、君が遊びに行きたさに此方へ向いたのだらう。夕飯でも一緒に食つて來るさ。」とぐい〳〵引張る。

「可いから放せッ、見ッともない。僕は斷じて行かん。行けぬのだ。」

「ちや少時待つてゐたまへ。逃げて了つちや可愛い豐子さんを殺すのだよ。こんな厄介な男たらありやしない。」と呟きつゝ多羅尾は、大澤の邸内へ入つて往つた。

黒塗の門、赤松の目隠し、應接間の壁額、池の端の杜若、忘られぬ人の顔……色んな幻がパノラマのやうに、宮井の眼先へ展けて來た。

五の六

多羅尾の往つた時、豐子は丁度家にゐた。早速應接室へ迎つて、はら〳〵しながら面會した。

「さア、どうぞお掛け下さいまし。毎度何うも。」

「いえ、……一寸貴女。散歩しませんか、突然ですが。」と腰掛けないで云ふ。

「ハア。」

「實はね、宮井君を其處まで伴れて來たのですよ。卒直にお逢ひなすつたら奈何です？」

「あの、宅へはお出で下さらぬのでせうか。」と眞赧になつてゐる。

「其れがですよ、來いと幾ら引張つても、きまりが惡いと見えて、諾かないのですな。ですから、奈何ですか。」

「……。」

「貴女もきまりが惡いのでせうな。」

「えゝ。」

「兎に角好機ですよ。我慢していらッしやいな。」

「ではお供しますから、少時お待ち下さいまし。」と包みきれぬ嬉しさを現はして彼方へ往つた。

多羅尾は其の間に、宮井を心許なく思つて、表へ出て見た。が、案の定、